

青森市埋蔵文化財調査報告書 第67集

# 深沢(3)遺跡

## 発掘調査報告書

平成14年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第67集

# 深沢(3)遺跡

## 発掘調査報告書

平成14年度

青森市教育委員会

## 序

東北新幹線盛岡 - 八戸間が平成14年12月に開業し、本県の観光やさまざまな経済活動に活力を与えてくれるものと期待され、八戸 - 新青森間の早期の開業が望まれます。

現在本市においても工事が一部着工しており、平成15年3月8日には、八甲田トンネルの梨ノ木工区が貫通を迎え、着実に進んでいる状況にあります。

他の開発事業でも同様ですが、工事予定地に埋蔵文化財包蔵地が含まれる場合、埋蔵文化財の保護と開発行為との円滑な調整が必要とされます。

本書は、東北新幹線建設事業に関する排土置場造成予定地内に所在した深沢(3)遺跡の調査成果をまとめたものです。

発掘調査は平成13・14年の両年度にわたり調査が実施され、縄文時代の遺構をはじめ、中世以降の木炭窯等の遺構が見つかりました。

この遺跡は、青森市内では高地に所在する遺跡であり、本市のいにしえ人の土地利用を知る上で貴重な資料を得ることとなりました。

最後に、本書を刊行するにあたり調査委託者をはじめとした関係諸機関および関係各位のご理解・ご協力に対し深く感謝の意を表する次第です。

平成15年3月

青森市教育委員会

教育長 角 田 詮二郎

# 例 言

1. 本書は、日本鉄道建設公団から青森市が委託を受けて、平成13年度および平成14年度に発掘調査を実施した深沢(3)遺跡(青森県遺跡番号01311)の報告書である。
2. 本書に記載される内容は、日本鉄道建設公団が計画した東北新幹線建設(八甲田トンネル梨ノ木工区発生土捨場造成)事業予定地内に関する部分についてまとめたものである。
3. 発掘調査は二カ年次にまたがり、調査面積は、第1年次である平成13年度は4,090㎡、第2年次である平成14年度は10,770㎡、総調査面積は14,860㎡である。
4. 深沢(3)遺跡は、平成13年度に青森市教育委員会が実施した月見野地区:東北新幹線に伴う土捨場造成予定地内試掘調査によって発見され、新規登録した遺跡である。遺跡範囲は通常表面観察等による遺跡推定範囲とは異なり、試掘調査による内容確認後の範囲である。試掘調査結果については、平成13年度に当委員会が刊行した『市内遺跡発掘調査報告書』(青森市埋蔵文化財調査報告書第64集)に掲載してある。なお、事実内容等の記述については本書が優先する。
5. 発掘調査は平成13・14年度の二カ年次にわたり実施された。第1年次の調査は平成13年10月11日～11月9日までの期間で実施し、第2年次の調査は平成14年5月27日～6月28日まで実施した。整理作業については平成13・14年度の両年度に実施した。
6. 発掘調査におけるグリッド杭打設測量については㈱青森データシステムに、自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、小野貴之、木村淳一が担当した。執筆・作成分担については、第1章第1節2.および第2節ならびにまとめと図版・観察表作成を小野が、その他の部分および編集を木村が担当した。また、第2章第2節については、青森県総合学校教育センター指導主事工藤一彌氏に執筆を依頼した。その他委託を実施した自然科学分析については、その報告を本書に収めた。
8. 調査に関わる出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会にて保管している。
9. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の方をはじめ多くの方々からご指導・ご協力をいただいた。  
(五十音順・敬称略)

青森県教育庁文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センター、穴澤義功、工藤大、瀬川滋、中嶋友文

# 凡 例

1. 図版番号は、本文中に図示したものについては「第 図」、それ以外については「図版」とした。表番号についても図版と同様で、本文中のものについては「第 表」、それ以外については「表」とした。また、第 章については執筆者の表記に従った。

## 2. 遺構の掲載について

方位は国土地理院第 X 系平面直角座標系に基づく座標北である。

各図の縮尺は以下の通りである。

1/50,000 1/25,000 1/1,200 1/750 1/240 1/120

水平基準は海拔高をメートル (m) で表示した。

遺構の略号は、SQ = 木炭窯・製炭土坑、SK = 土坑、SD = 溝跡である。

遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号 - 番号とした。

(例：第 1 号木炭窯 = SQ - 01)

本書で使われるグリッドについては、4 mメッシュの小グリッドで、北西 - 南東軸にアルファベット、北東 - 南西軸に数字を配し、アルファベットは北西方向へ、数字は南西方向へ増加している。呼称についてはアルファベットと数字を組み合わせ、東隅の杭の番号を使用した。

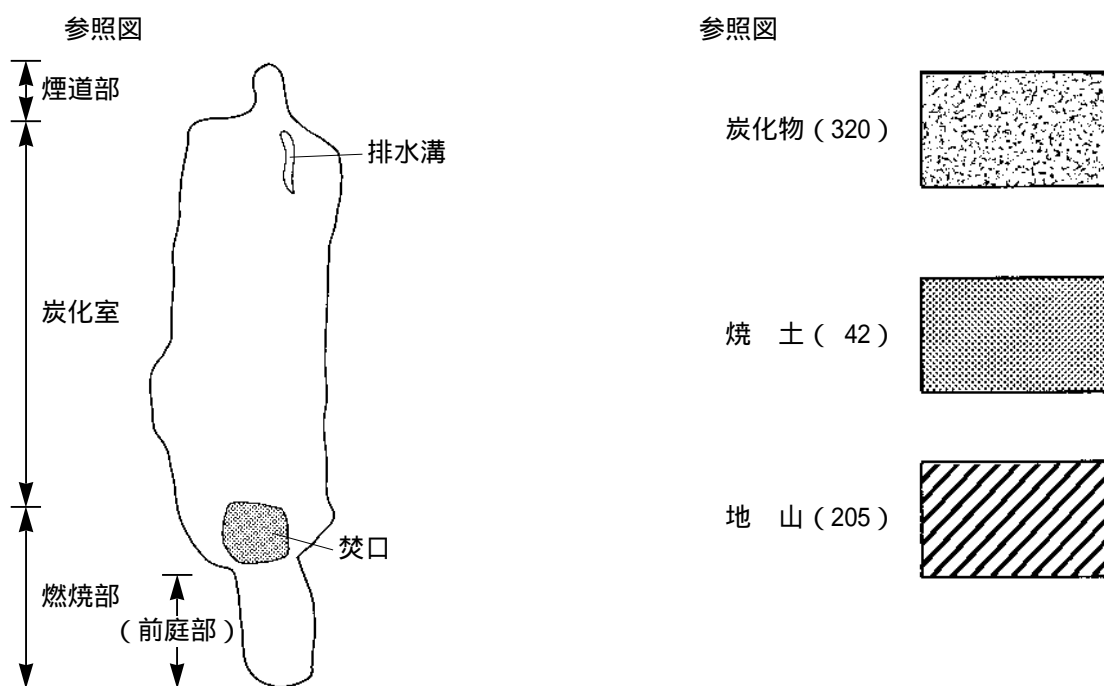
本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1993) に準拠した。

遺構の規模については、基本的に長軸 × 短軸 × 深さを cm で表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記した。

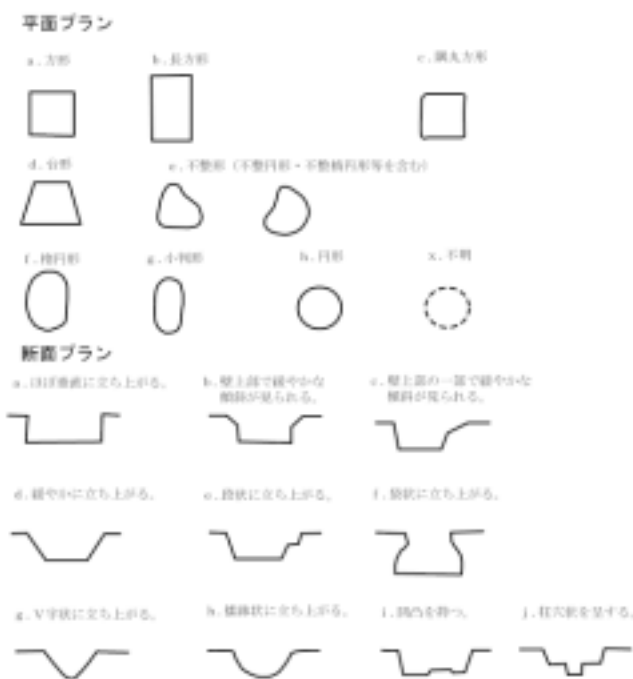
木炭窯の図示の仕方について燃烧部と煙出部の向きは統一していない。

木炭窯の位置についての本書での記述の方法は下図左のとおりである。

本書の遺構図中で使用される網かけ等の指示については下図右のとおりである。



土坑の文および表中で標記されている類型化の記号は当委員会が平成12年度に刊行した『野木遺跡発掘調査報告書』（青森市教育委員会2001）で提示した類型化に基づき提示している。今回土坑・ピットの断面構造について新たに2類の項目を追加している。



### 3. 土器の分類について

本遺跡で出土した土器は、下記のとおり分類した。

- 第 群土器 縄文時代前期の土器
- 第 群土器 縄文時代中期の土器
- 第 群土器 縄文時代後期の土器
- 第 群土器 縄文時代晩期の土器
- 第 群土器 弥生時代の土器
- 第 群土器 平安時代の土器

### 4. 遺物の掲載について

各図の縮尺は以下のとおりである。

土器 1/3 石器 1/1.5・1/3

遺物実測図の表現

石器の遺物図版中で使用されるスクリーントーンの指示については下図のとおりである。

参照図



# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第 章 調査経緯	
第 1 節 調査に至る経緯 .....	1
第 2 節 調査要項 .....	2
第 3 節 受託費 .....	3
第 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 遺跡の位置 .....	5
第 2 節 地理的環境 .....	6
第 3 節 歴史的環境 .....	9
第 章 調査の概要	
第 1 節 試掘調査 .....	11
第 2 節 本発掘調査 .....	12
第 3 節 調査方法 .....	12
第 4 節 地形と層序 .....	14
第 章 調査成果	
第 1 節 遺構 .....	17
1 . 木炭窯・製炭土坑 .....	17
2 . 土坑 .....	20
3 . 溝跡 .....	23
第 2 節 遺物 .....	23
1 . 土器 .....	23
2 . 石器 .....	24
第 章 自然科学分析	
深沢(3)遺跡から出土した炭化材の年代 .....	25
まとめ .....	27
引用・参考文献 .....	28
図版	
写真図版	
報告書抄録	
既刊埋蔵文化財関係報告書一覧	

## 第 章 調査経緯

### 第 1 節 調査に至る経緯

日本鉄道建設公団（以下公団）は、現在工事が進行中の八甲田トンネルの梨ノ木工区の掘削工事で発生する土砂の土捨場用地が必要となり、工事建設所管である青森市へその土捨場用地の協力を打診した。青森市の新幹線建設事業への窓口である都市整備部都市政策課新幹線・高速対策室（以下新幹線対策室）では、市内に所在する青森市所管のいくつかの土地に対して用地として対応しうる候補地を 2 カ所（月見野地区・小館地区）に絞り込み、平成13年 2 月 1 日付け青市都号外にて、市の関係各課に対し、土捨場候補地に対する説明会開催と意見聴取について依頼文書を発送し、埋蔵文化財保護担当の文化財課（以下当課）も会議の出席と意見の提出を行った。当課では、小館地区については国史跡である小牧野遺跡へのアクセス道路と重複するなどの問題点を指摘し、また、月見野地区については周知の埋蔵文化財包蔵地がこれまで確認されていない状況ではあるが、事前に当課と協議し、当課担当職員が現地の確認をする必要性のある旨を回答した。

年度を明けて、平成13年度に入り、当課と新幹線対策室と再度協議を行い、当課職員が現地ならびに周辺の状況を確認したところ、開発予定地周辺の切土された法面から時期不明の製炭土坑の一部が確認され、開発予定地内に未発見の遺跡が所在する可能性が想定された。

そこで、青森市教育委員会（以下当委員会）では、埋蔵文化財保護と開発協議との円滑な調整を図るため、試掘・確認調査を実施している市内遺跡発掘調査事業の中で、当該予定地約40,000㎡に対し、平成13年 7 月16日～ 8 月 6 日の期間で埋蔵文化財の有無について試掘調査を実施した。

調査の結果、遺構の密度がそれほど密集していないものの、製炭土坑、溝跡が確認され、縄文土器、平安時代の土師器等が出土し、埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、深沢(3)遺跡（青森県遺跡台帳番号 0 1 3 1 1）として新規登録を行った。また、公団に対し、開発予定地に対し当課との協議の必要性がある旨を提示した。

公団と当委員会との協議において、開発予定の土捨場は必要不可欠なものであり、大規模な面積を必要としているため、予定地の変更は難しい状況にあるという点と、当面の間は仮置の土捨場で対応可能であるが、遅くとも平成14年の夏頃までには調査の終了を要望している点などを踏まえて、記録保存を前提とした発掘調査を実施する方向性となった。ただし、年度途中であったため、当委員会の発掘調査工程は、他事業に担当が既に張り付いていた状況にあり、その対応が難しい状況にあったが、担当の配置状況を調整し、工事工程等を踏まえて平成13年度中に切土の発生する部分について一部発掘調査を実施することとなった。

その結果、公団は平成13年 9 月25日付け盛支用一第201号にて発掘調査の依頼をし、当委員会では同日青市教委文第152号にて受諾の旨の回答をした。

発掘調査は、第 1 年次の平成13年度は、平成13年10月21日～11月 9 日の期間で、第 2 年次の平成14年度は、平成14年 5 月27日～ 6 月28日の期間で実施することとなった。

また、予算措置については、平成13年度は年度途中であったことから緊急的に非計上費で対応し、12 月補正後計上費として予算措置を行い、平成14年度は当初予算から計上費として対応している。



## 第2節 調査要項

### 1. 調査目的

東北新幹線建設事業に係る排土置場造成工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2. 遺跡名及び所在地

深沢(3)遺跡 (青森県遺跡番号 01311) 青森県青森市駒込字深沢1-56ほか

3. 事業年度 平成13～14年度

4. 発掘調査期間 平成13年10月21日～11月9日(第1年次)

平成14年5月27日～6月28日(第2年次)

5. 整理作業期間 平成14年10月11日～平成14年11月25日

6. 調査面積 14,860㎡ (第1年次4,090㎡, 第2年次10,770㎡)

7. 調査委託者 日本鉄道建設公団

8. 調査受託者 青森市教育委員会

9. 調査担当機関 青森市教育委員会事務局文化財課

10. 調査指導機 青森県教育庁文化財保護課

11. 予算措置 調査委託者側で措置

### 12. 調査体制

平成13年度

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	角 田 詮二郎
事 務 局 長	大 柴 正 文
事 務 局 参 事	
文化財課長事務取扱	遠 藤 正 夫
文化財課長補佐	工 藤 勝 則
主 査	堀 谷 久 子
文 化 財 主 事	小 野 貴 之(調査担当)
”	木 村 淳 一
”	児 玉 大 成
”	設 楽 政 健
主 事	木 立 麻 子(庶務担当)
調 査 補 助 員	長 内 礼 二
”	本 多 顕 子
”	工 藤 かおり
”	齋 藤 奈穂子

平成14年度

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	角 田 詮二郎
教 育 部 長	大 柴 正 文
教 育 次 長	竹 内 徹
事 務 局 参 事	
文化財課長事務取扱	遠 藤 正 夫
文化財課長補佐	工 藤 勝 則
主 査	木 浪 貴 子
文 化 財 主 事	小 野 貴 之 (調査担当)
”	木 村 淳 一
”	児 玉 大 成
”	設 楽 政 健
主 事	足 澤 愛 子 (庶務担当)
調 査 補 助 員	蝦 名 純
”	長 内 礼 二
”	本 多 顕 子
”	工 藤 かおり
”	久米田 さやか

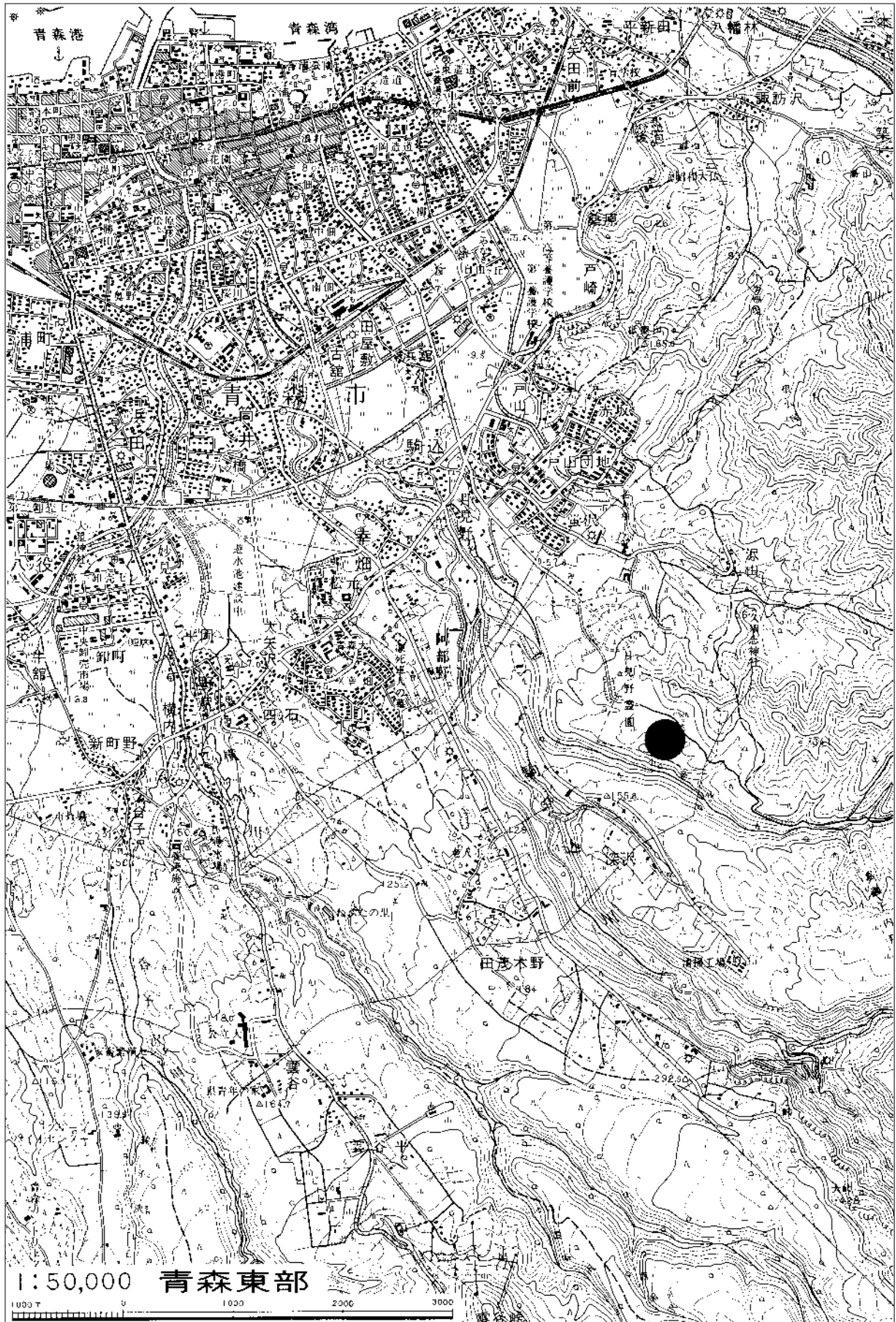
### 第 3 節 受託費

発掘調査は平成13年度ならびに平成14年度に実施した。また、整理作業は平成13年度に一部実施し、平成14年度の時点で最終的な報告書刊行を踏まえた作業を実施している。よって平成13年度は発掘調査・整理作業事業費、平成14年度は発掘調査・整理作業・報告書刊行事業費という取扱いになる。

第 1 表 費用内訳

単位：千円

	平成13年度	平成14年度	合 計	備 考
共 済 費	97	158	255	労働災害保険料、社会保険料、雇用保険（調査補助員）
賃 金	1,700	5,309	7,009	調査補助員、作業員
報 償 費	0	28	28	原稿執筆謝金
旅 費	23	25	48	勤務地内旅費
需 用 費	138	909	1,047	消耗品、印刷製本費
役 務 費	60	433	493	電話料、器材運搬料、現場仮設トイレ汲取料、切手
委 託 料	231	65	296	測量委託、遺物科学分析
使用料及び賃借料	1,644	2,241	3,885	プレハブ借上、重機借上
合 計	3,893	9,168	13,061	



第1図 遺跡位置図

## 第 章 遺跡の位置と環境

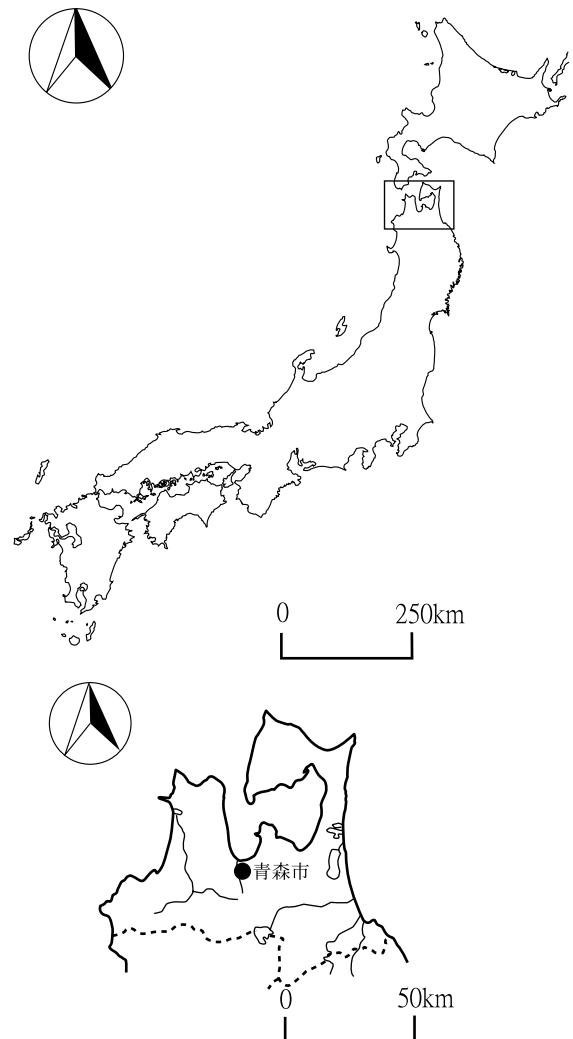
### 第 1 節 遺跡の位置

青森市は、北に陸奥湾を臨み、南には八甲田山がそびえ立つ人口約30万人の青森県の県都である。市の面積は692.40km<sup>2</sup>を測り、市街地を中心に東西約10 km、南北約 5 kmの青森平野が広がっている。陸奥湾を臨んだ北側以外の部分はU字状に丘陵に囲まれており、北西部は津軽半島の中央をはしる中山山脈からのびる緩やかな丘陵が広がり、西部は海成起源の岡町層ならびに十和田・八甲田山火山噴出物の堆積層を基盤とする緩やかな丘陵地であり、その南端部分には平野部と丘陵地との境に入内断層が走っている。入内断層は西部の丘陵部分と八甲田山火砕流堆積物によって形成された丘陵をも区切っている。南部の丘陵は青森市南部に所在する八甲田山の火砕流堆積物により形成された台地であり、荒川、合子沢川、横内川、駒込川八甲田山麓から市街地へ北流する河川により開析が進み、比較的傾斜の緩やかな丘陵が広がっている。また、東部は南東側の部分が南部と同様に八甲田山火砕流で覆われた部分があるが、新生代新第三紀の火山岩や堆積岩で構成されるエリアが所在する。

遺跡は、八甲田山火砕流堆積物によって形成された台地のうち、駒込川の旧支流と赤川に挟まれた丘陵上標高145～160mの青森市月見野森林公園敷地内に所在する。

調査地点は市街地から約 9 km離れた山間部にあたり、周辺には月見野森林公園の敷地が広がっており、遺跡の登録以前にグラウンドや遊歩道およびキャンプ場が整備された状況であったが、それ以外に目立った開発行為などもなく、杉などの植林により保全されている地区であった。もともとは国有林であつたらしく、遺跡の背後には標高252mの山があり、戦前の旧陸軍時代には砲台の標的として利用されていたらしく、試掘調査の時点で、調査区内から昭和12年 6 月銘の八十八式野戦砲の砲弾などが見つかり、さらに、周辺から空薬莖や銃弾などが多数見つかったという話があることから演習場としてかつて利用されていた可能性が高い。

遺跡の1.5km北西の方向には月見野霊園が所在しており、その周辺部には畑地が広がっていたが、もともこの周辺も旧陸軍の軍用地として利用されていたらしく、戦後になって畑地として開墾されている。3 km北西に戸山団地が造成されて以来、開発行為が相次いでおり、協議の必要性がある地点が相次いでいる状況にある。



第 2 図 位置図

## 第2節 地理的環境

青森県総合学校教育センター指導主事 工藤 一彌

青森平野は新生代第四紀(約170万年前～現在)に形成された海岸平野であり、東西約10km、南北約5kmのほぼ直角三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南は八甲田火山群につらなる火山性の台地、東は、東岳を中心とした古い地層の分布する比較的急峻な山地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。調査地域は地形的・地質的にみて、青森市南部の八甲田山系と東部の奥羽山脈の延長部との境界部に位置する。水系図から、南部は八甲田火山群を中心とする放射状の水系、東部は折紙山・堀子岳・榑木森山などを中心とする放射状の水系が読み取れる。

南～南東側の火山性台地は、八甲田カルデラ(現在の田代平)から噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」で構成されており、八甲田火山群から北方に続き、標高は40～500mである。八甲田牧場(標高500m)、雲谷平(200m)、梨の木平(200m)、青森ゴルフ場(150m)、月見野霊園(100m)など緩傾斜の平坦面が広く残っており、傾斜は荒川右岸の青森ゴルフ場付近で約2.5度、雲谷付近で約3度、四ツ石付近で約2.2度、田茂木野付近で約2.7度、梨の木付近で約3.5度、平均で約3度である。この台地を構成する溶結凝灰岩は侵食に弱いため、入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など、いずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。青森市南部の遺跡は平野の南東部に広がるこの火山性台地の北端に立地し、平野部に対し、北～北西側に緩く傾斜した台地上に存在していることが多い。この台地は北～北西に流れる数本の河川によって分けられている。入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川に挟まれた部分は平野に対し舌状に突き出した台地となっており、縄文時代の遺跡は各台地上に大部分が分布する。これは縄文海進によって海面が現在より約5m上昇したため平野部の約半分ほどが海面下になっていたことによるものと考えられる。

東部の山地は地質構造上、東北の脊梁山脈である奥羽山脈の延長部にあたり、新生代新第三紀(約2,500万年前～約170万年前)の火山岩、堆積岩などで構成されており、流水の侵食作用により起伏の大きい地形となっている。扇沢・築木館など、遺跡は野内川流域の段丘面や緩傾斜地に存在し、起伏の大きい所にはない。

本地域の地層は大部分が新生代(約6,500万年前～現在)の地層で構成されており、先第三系(約6,500万年前より古い地層)は東部の東岳付近と夏泊半島の東岸に部分的に分布している。東岳付近のものは石灰岩、粘板岩、チャートなどの堆積岩と花崗岩からなり時代未詳である。夏泊半島のものは石灰岩、チャートからなり、石灰岩から発見されたコノドントという化石によって中生代三畳紀～ジュラ紀であることが分かった。東岳の先第三系の年代は、夏泊半島と比較的近距離にあることや他地域の花崗岩の年代から中生代であろうと推定されている。最近では、県内の先第三系堆積物はジュラ紀～白亜紀の間に海溝の陸側に積み上げられてきた付加体堆積物と考えられるようになってきた。

新生代新第三紀の地層は下位から金ヶ沢安山岩類・四沢凝灰岩・和田川層の順に重なっている。金ヶ沢安山岩類は主に、変朽安山岩(風化・変質した安山岩)、凝灰岩、凝灰角礫岩などからなり、全体的に変質が激しく暗緑色～紫色をしている。これらの岩石は新第三紀の海底火山活動によるものであり、野内川上流一帯に分布している。四沢凝灰岩は金ヶ沢安山岩類分布域の周辺や駒込川・荒川の谷底に分布し、安山岩、玄武岩、泥岩、凝灰岩からなる。凝灰岩はグリーンタフ(緑色凝灰岩)と呼ばれ緑色を呈し、流紋岩質～安山岩質である。和田川層は暗灰色～暗褐色の泥岩を主体に、凝灰角礫岩や細粒凝灰

岩を挟む。凝灰岩は野内川下流に分布し、淡緑色～淡黄色である。

新生代第四紀（約170万年前～現在）の地層は岡町層と十和田・八甲田火山噴出物に分けられる。岡町層は青森市西部の岡町、新城付近に分布し、砂、礫、シルトなどからなり、西部の丘陵地の基盤を構成している。十和田・八甲田火山噴出物は八甲田火山溶岩、八甲田火砕流堆積物、降下火山灰等からなり、溶岩は両輝石安山岩～玄武岩質安山岩で多くの種類に分類されている。

八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく2つに区分され、そのうち1期のものについては水底火砕流堆積物として産する場合があります、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のもは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はK-Ar法により八甲田第1期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第2期火砕流堆積物を約40万年前の活動としている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錘データによると断層の東側で1,000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。田代平付近には植物化石を多産する砂岩、凝灰岩、泥岩の薄互層からなる湖水堆積物があり、これを田代平湖成層といい、火砕流噴出によって生じたカルデラ湖に堆積したものと考えられる。

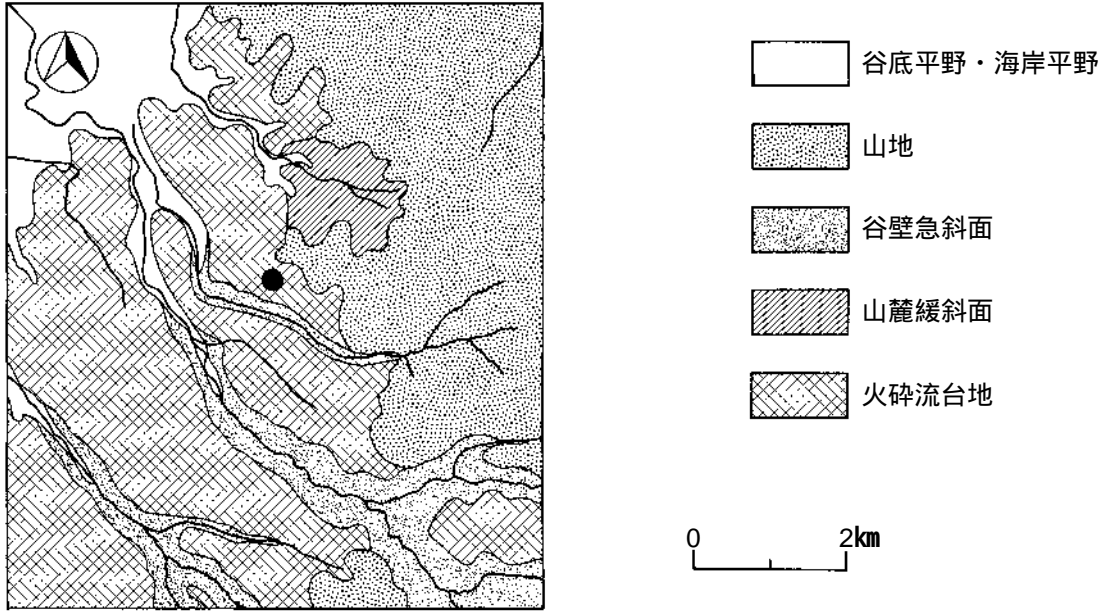
青森付近の火山灰層は沢田（1976）により3層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

本遺跡の基盤は遺跡内には分布しないが、周辺の調査から八甲田第2期火砕流堆積物と考えられる。黒色土の下位には広範囲に黄褐色火山灰層が分布しており、これは月見野火山灰と考えられる。桜峯遺跡など比較的標高の高い遺跡と同様に、月見野火山灰の下位に赤褐色の粘土質火山灰が分布しており、これは大谷火山灰と考えられる。最下位の三内火山灰は遺跡では確認できなかった。基盤の八甲田火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多い。径が1mm前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は最大でも50～100mに見積もられており、遺跡の東方には和田川層と考えられる凝灰岩や泥岩などが分布し、荒川や駒込川の中流部などでも下位の第三系は比較的浅いところに分布しており、青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布する。各遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

#### 引用・参考文献

- |         |      |                            |
|---------|------|----------------------------|
| 北村 信他   | 1972 | 青森県の地質（青森県）                |
| 沢田庄一郎   | 1976 | 近野遺跡発掘調査報告書（ ）（青森県教育委員会）   |
| 沢田庄一郎   | 1976 | 三内丸山（ ）遺跡発掘調査報告書（青森県教育委員会） |
| 沢田庄一郎   | 1978 | 近野遺跡発掘調査報告書（ ）（青森県教育委員会）   |
| 池田 敬    | 1979 | 青森市の自然（青森市教育委員会）           |
| 岩井 武彦 他 | 1982 | 土地分類基本調査「青森西部」表層地質（青森県）    |

- |             |      |                             |
|-------------|------|-----------------------------|
| 岩井 武彦 他     | 1983 | 土地分類基本調査「青森東部」表層地質(青森県)     |
| 村岡 洋文・高倉 伸一 | 1988 | 10万分の1八甲田地熱地域地質図・説明書(地質調査所) |
| 箕浦 幸治 他     | 1999 | 青森県の地質(青森県)                 |
| 青森県         | 2001 | 青森県史「自然編 地学」                |



第3図 地形区分図

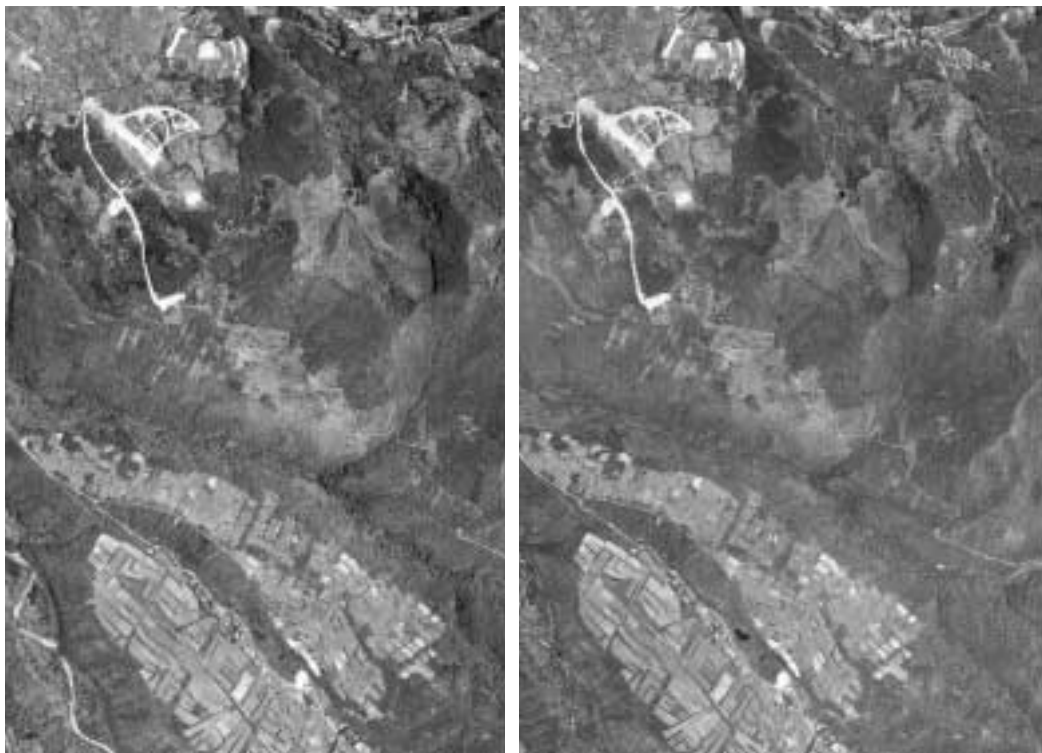


写真1 国土地理院撮影 1969年 空中写真(実体視)

### 第 3 節 歴史的環境

八甲田火砕流堆積物によって形成された丘陵地全体では、近年60箇所を越える遺跡の所在が確認されている。

深沢(3)遺跡が所在する駒込川支流と赤川に挟まれた丘陵上では、16箇所の遺跡の所在が確認されており、河川挟まれて所在する丘陵としては遺跡が密集している部類に属する。ただし、これまで発掘調査が実施された遺跡は蛭沢遺跡、玉清水(1)・(3)遺跡の3遺跡のみで、残りは表面採集や工事の際の不時発見によるものである。

本丘陵内で人々の営みを示す最古の資料は、縄文時代早期貝殻文系寺ノ沢式期併行段階の遺物が出土した蛭沢遺跡である。遺跡は、平野部に近い標高約30m付近に所在し、昭和51年度に青森市蛭沢遺跡発掘調査団が戸山団地建設事業に伴って発掘調査を実施している。調査の結果、縄文時代早期の土器が出土した土坑が12基、遺物は出土していないが、堆積土等から早期に属すると推定される土坑が3基の合計15基を検出している。本遺跡から出土した土器の一群が吹切沢式期と物見台式期の間を埋める蛭沢A式として型式化された標識遺跡である(青森市蛭沢遺跡発掘調査団1979)。

縄文時代前期の遺跡は、駒込川支流に面した丘陵の西側に所在する玉清水(3)遺跡が挙げられる。遺跡は昭和44・45年度に発掘調査が実施され、円筒下層b～d式期の土器が包含している住居跡を4軒精査している。また、周辺には現地踏査による確認であるが、前期の遺物が採集される遺跡が数多く所在している(青森市教育委員会1971)。

縄文時代中期は、前述した蛭沢遺跡で、円筒上層d～e式期の竪穴住居跡7軒をはじめ、フラスコ状土坑6基を検出している(前掲1979)。

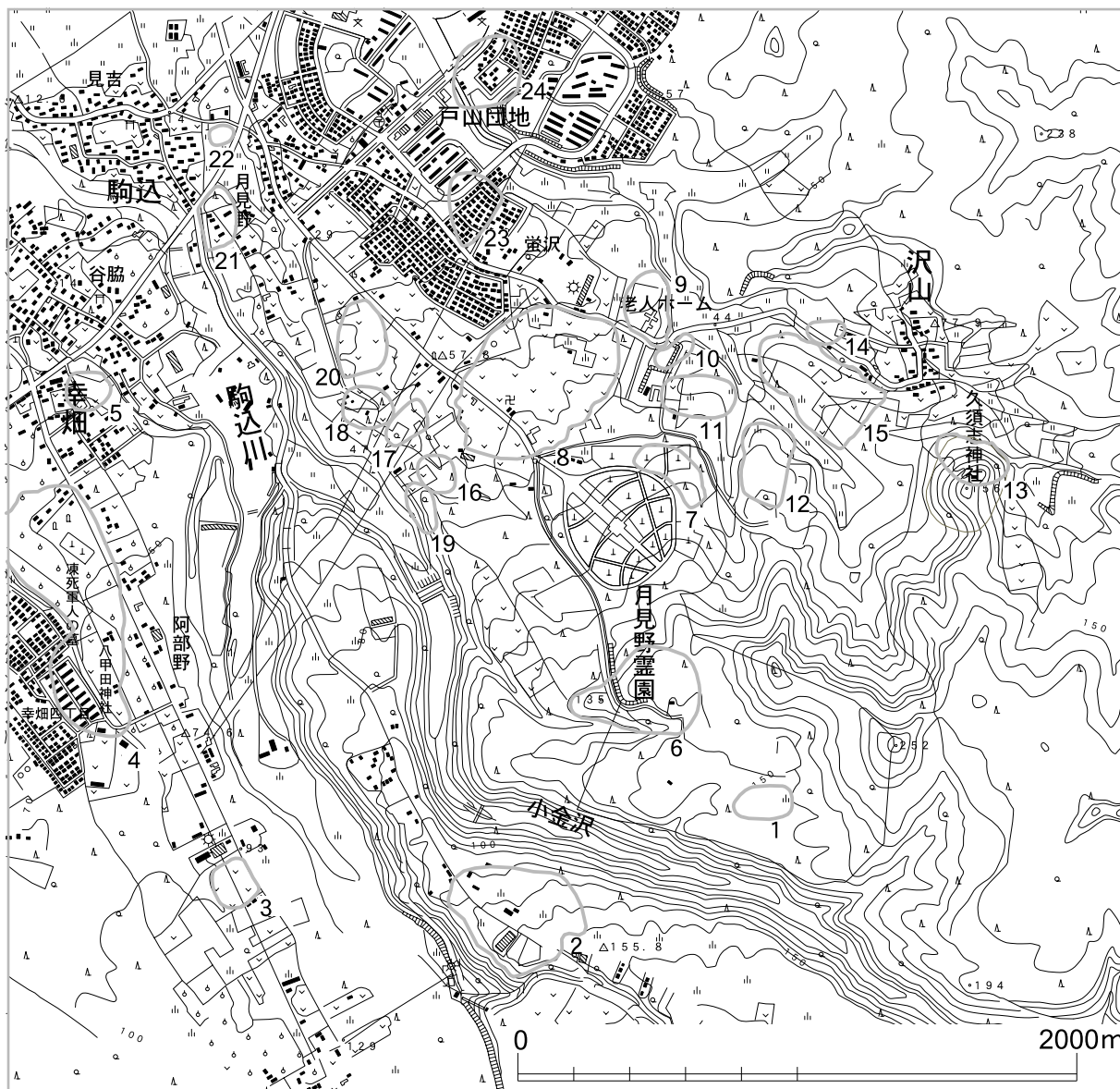
縄文時代後期は、蛭沢遺跡、月見野(1)遺跡が挙げられる。蛭沢遺跡では、竪穴住居跡4軒、土器埋設遺構1基、フラスコ状土坑を78基検出している。出土遺物は十腰内群に併行すると考えられる瘤付文系の土器が主体を占める他、蛭沢3群土器として葛西勵氏編年の十腰内式期の前段階にあたる土器群が出土している(前掲1979)。また、月見野(1)遺跡では、工事中のブルドーザーによる不時発見で甕棺土器が葛西氏により調査が行われている(葛西1978)。

縄文時代晩期は、玉清水(1)遺跡、蛭沢遺跡、沢山(1)遺跡が挙げられる。玉清水(1)遺跡は当委員会により昭和40・41年度に発掘調査が実施され、大洞B～C式期の土器・土製品・石製品が出土している(青森市教育委員会1967)。また、昭和59年度には早稲田大学の桜井清彦氏らにより当委員会の調査地点から約200m北東の地点を発掘調査されている。遺構は、立石を伴う配石遺構と土坑11基が検出している(桜井ほか1985)。蛭沢遺跡では、晩期中葉のフラスコ状土坑が11基検出しており、中にはベンガラが散布されたものや石棒などの副葬品が出土し、土坑墓と認定できる資料も含まれる(前掲1979)。沢山(1)遺跡は、昭和43年度に月見野遺跡同様工事中の不時発見により、晩期終末の包含層が調査された。市内では類例が少ない大洞A式土器の資料がまとまって出土している(葛西1969、葛西ほか1994)。

弥生時代は、蛭沢遺跡から土坑1基が検出しており、念仏間式期併行の土器が遺構外を中心に出土している(前掲1979)。

弥生時代以降この地域で遺跡の所在が確認されている時代は平安時代で、採集資料ではあるが、玉清水(3)遺跡からは、「坏一口」と墨書された土師器椀が採集されている。蛭沢遺跡では竪穴住居跡62軒と掘立柱建物跡5軒を検出している。また、野内環状線によって一部遺跡が横断されている駒込館遺跡では、今年度、開発協議による確認調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡3軒が確認されている。





第4図 周辺の遺跡位置図 (S = 1/25,000)

(本図は、青森市教育委員会が作成した「青森市遺跡地図(数値地図)」を部分的に複写の上、加工し転載したものである。)

第2表 遺跡一覧表

番号	台帳番号	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
1	311	深沢(3)遺跡	集落跡	駒込字深沢	縄文(前・中・後・晩) 弥生、平安	青森市教育委員会2002
2	234	深沢(2)遺跡	散布地	駒込字深沢	縄文(前・後)	
3	220	阿部野(3)遺跡	散布地	幸畑字阿部野	平安	
4	050	阿部野(1)遺跡	集落跡	幸畑字阿部野	縄文、平安	
5	219	阿部野(2)遺跡	散布地	幸畑字阿部野	平安	
6	286	月見野(6)遺跡	散布地	駒込字深沢	縄文(晩)	
7	009	月見野霊園遺跡	散布地	駒込字月見野	平安	
8	264	月見野(5)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文	
9	010	月見野(1)遺跡	散布地	駒込字蛭沢	縄文(前・後)	葛西1978
10	192	月見野(2)遺跡	散布地	駒込字蛭沢	不明	
11	042	沢山(1)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	葛西1969, 葛西ほか1994
12	044	沢山(3)遺跡	散布地	沢山字平野	平安	
13	043	沢山(2)遺跡	散布地	駒込字月見野、沢山字平野	縄文、平安	
14	288	沢山平野(1)遺跡	散布地	沢山字平野	縄文(前・中・晩)	
15	289	沢山平野(2)遺跡	散布地	沢山字平野	縄文(前・中・晩)、平安	
16	006	玉清水(1)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	青森市教育委員会1967, 桜井ほか1985
17	007	玉清水(2)遺跡	散布地	駒込字月見野	不明	
18	008	玉清水(3)遺跡	集落跡	駒込字月見野	縄文(前)、平安	青森市教育委員会1971
19	235	月見野(4)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(後)	
20	221	月見野(3)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文、平安	
21	048	駒込館遺跡	集落跡	駒込字桐ノ沢	平安	
22	295	見吉遺跡	散布地	駒込字蛭沢	平安	
23	057	蛭沢遺跡	集落跡	駒込字月見野	縄文(早・前・中・後) 弥生、平安	青森市蛭沢遺跡発掘調査団1979
24	053	赤坂遺跡	散布地	戸山字赤坂	平安	

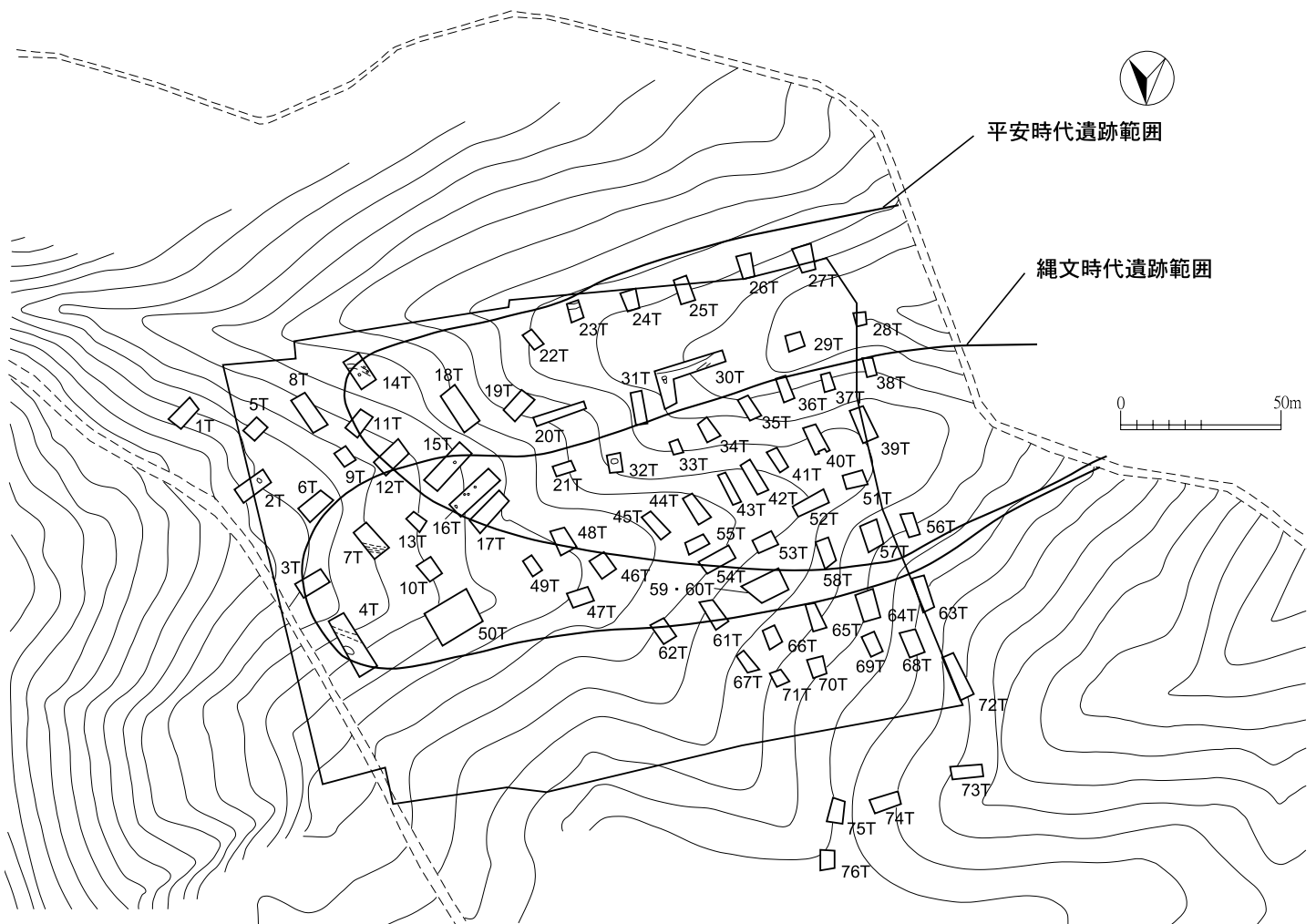
## 第 章 調査の概要

### 第 1 節 試掘調査

試掘調査は、平成13年度に当委員会が行った市内遺跡発掘調査事業の中で「月見野地区：東北新幹線建設に伴う土捨場予定地内埋蔵文化財試掘調査」として平成13年7月16日～8月6日の15日間で実施した。

造成予定地は現況が山林であったため、木の伐採および伐採木の搬出作業が終了した地点から重機によるトレンチ掘りと人力による鋤簾がけで調査した。総トレンチ数は76カ所で、調査面積は造成予定面積約40,000㎡に対し約8%にあたる3,245㎡であった。

調査の結果、丘陵頂部であるトレンチ4・9・40・48・50から縄文時代前・中期および晩期の土器が出土し、南側の丘陵下部の沢地状の地形から溝跡状の落ち込みを検出しており、土師器の破片が出土した。それ以外に南傾斜面上から製炭土坑と推定される土坑が確認された、このことによって、開発予定地は遺跡の範囲であることが判明し、深沢(3)遺跡として新規登録を行った。



第 5 図 試掘調査トレンチ配置図

## 第2節 本発掘調査

試掘調査の結果を受けて、日本鉄道建設公団との協議の結果、記録保存を前提とした発掘調査の実施となった。調査対象面積は試掘調査の結果を基に、遺構が存在する地点を中心に3ブロック(第6図参照)設定し、合計14,860㎡としたが、発掘調査期間については、調査開始可能時期が平成13年の10月下旬であったため、物理的に年度内にすべてを終了することが不可能であったため、平成13年度は調査可能な4,090㎡を対象に調査を実施することとなった。

翌、平成14年度には、残地部分の10,770㎡を対象に調査を実施した。

## 第3節 調査方法

本調査にあたり、試掘調査では工事用仮設杭を利用した測量による作図であったが、調査区の設定に伴い、グリッド法による測量杭および水準点の移動が必要となった。グリッド杭の打設および水準点の付与については工事用4級基準点から打設委託により対応した。

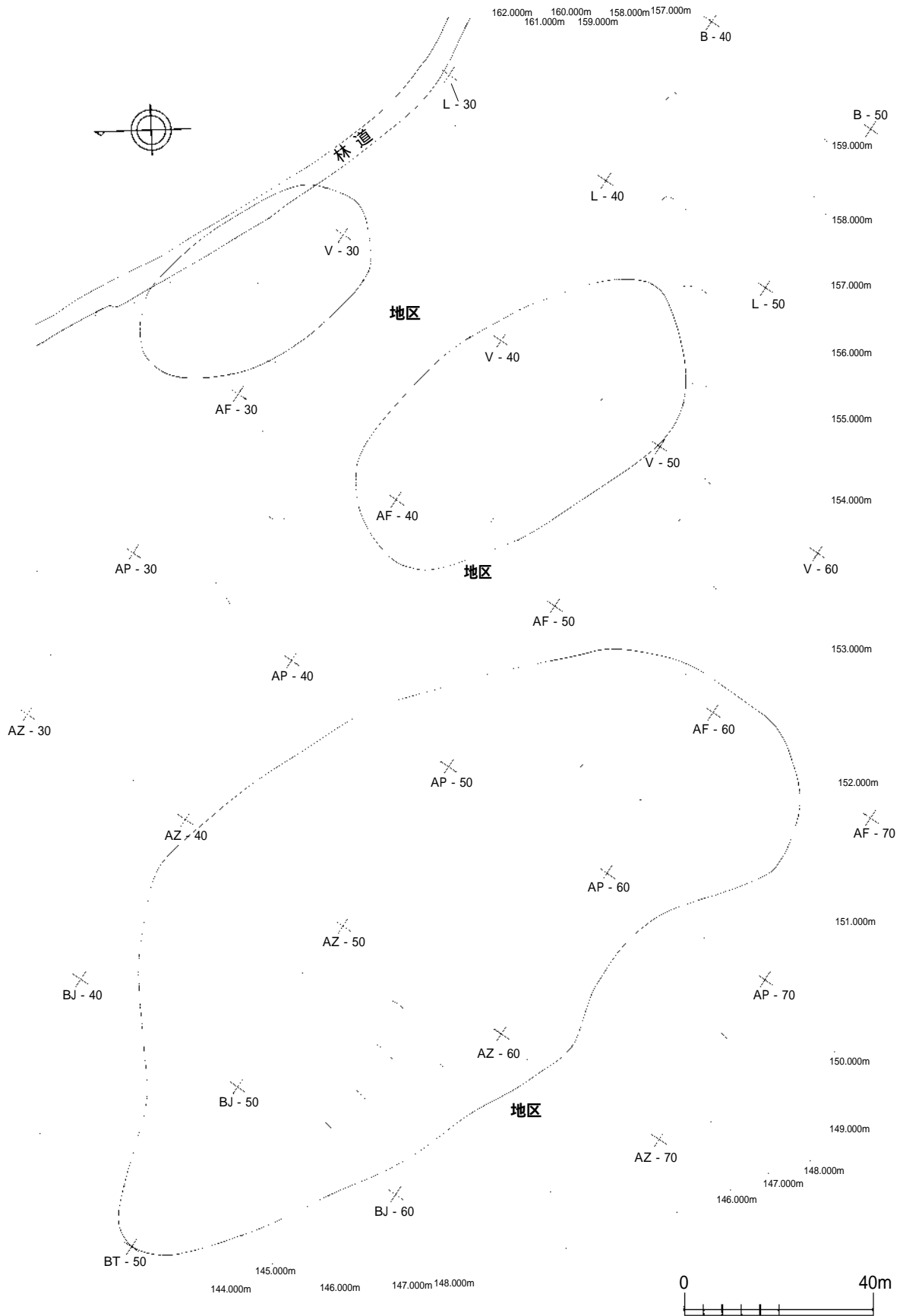
グリッドは4×4m単位の小グリッドで、北西-南東軸にアルファベット、北東-南西軸に算用数字を付与し、番号等は北西-南東軸では北西側に、北東-南西軸では南西側に伸びていくに従って大きくなるように付与した。グリッドの呼称は杭の東隅のアルファベットと算用数字組み合わせ、具体的にはAM-45のような名称で呼称した。

調査については試掘調査で遺構の密度が低く、具体的に堆積状況および土量を事前に把握していたことから、重機による表土処理を行い鋤簾がけにより遺構確認、遺構の掘削、精査という形を基本にして行った。調査予定地の現況は山林であったが、試掘調査の時点で伐採が完了しており、本発掘調査開始時点では立木等の問題は存在しなかった。試掘調査結果により本調査不要地点が判明していたため、表土処理および遺構掘削等の排土についても開発予定地内の調査不要地点へ排出という方法をとった。

各遺構の呼称については、調査時点で土坑を 土、溝跡を 溝、木炭窯・製炭土坑を 炭窯として取り扱っている。本書の掲載に際し、土坑にSK、溝跡にSD、木炭窯・製炭土坑にSQという略号を付し、確認した順番で算用数字を組み合わせ遺構番号とした。具体的には第1号土坑はSK-01という呼称で取扱う。また、本報告書内においても遺構番号で表記している遺構のうち、土坑として取り扱ったものの中には他の報告書ではピット・柱穴として取り扱われるものが含まれている。それ以外に本来であるのなら製炭土坑は土坑扱いとなるが、本書の掲載に際し調査時の取り扱いを優先する。

遺構の精査にあたり、土坑は基本的に2分法で半裁し、セクション図を作成し、セクションラインと交差する側についてエレベーション図を作成した。木炭窯については堆積土が第A層で確認した遺構がほとんどであったため、削平されたものがほとんどで、遺構精査に取りかかった時点で、燃焼部および煙出部の明確でない遺構も含まれている。また、屋外施設に伴う可能性がある柱穴等については確認できなかった。遺物の取り上げについては遺構内については基本的に覆土層毎に一括で取り上げ、遺構外出土資料についてはグリッド毎に層一括で取り上げている。セクション図における土層の注記については『新版標準土色帖』を参照した。

写真撮影については35mmのモノクロ-ム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い適宜行った。



第 6 図 調査区割図

## 第4節 地形と層序

本遺跡は、駒込川の支流と赤川に挟まれた丘陵上に立地する。今回の調査区は中央部に丘陵の尾根があり、北側と南側に傾斜した地形を呈しており、遺構の立地は、木炭窯等は、丘陵の尾根から南側の斜面上を中心に検出している。逆に北傾する斜面からは縄文時代の遺物が包含する箇所や小規模な土坑が数基検出したのみで、土地利用として時代毎に変化が生じている可能性が考えられる。

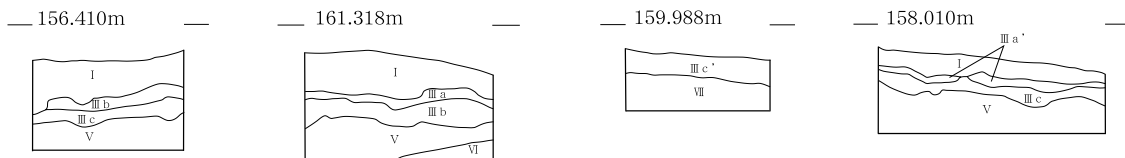
遺跡の基盤は青森市南部と同様に八甲田火砕流の上位に堆積する月見野火山灰層と大谷火山灰層であり、地点によっては最上位の月見野火山灰層が欠落した箇所も見受けられる。

地山上位の堆積層はこの地域の土地利用の影響（旧陸軍の演習場）にさらされた箇所が部分的に見受けられており、下位の土層中に上位の土層がブロック状に混入している箇所が数箇所確認されている。

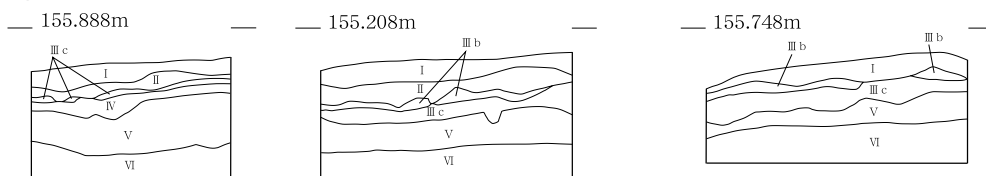
ただ、基本となる堆積層は、当委員会で発掘調査を実施している青森市東部地域に所在する稲山遺跡や青森市南部に所在する小牧野遺跡・野木遺跡等の基本層序として確認されている土質の土層の堆積が認められている。

下記に提示した基本層序図中で、第 a~ c層として取り扱った土層が、他の遺跡で縄文時代~平安時代にかけての文化層として認定している土層に合致し、全体的にローム粒や炭化物の混入が認められ、地点によって欠落する箇所がある。第 層が縄文時代の無遺物層に合致する。第 層の漸移層は褐色もしくはにぶい黄褐色という明色系の土色を呈し、ローム粒・炭化粒が混入している。また、遺構内から確認できたものの基本層序中では降下火山灰の確認は認められなかった。

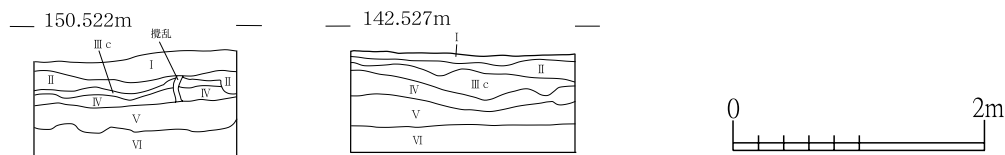
### ①地区



### ②地区



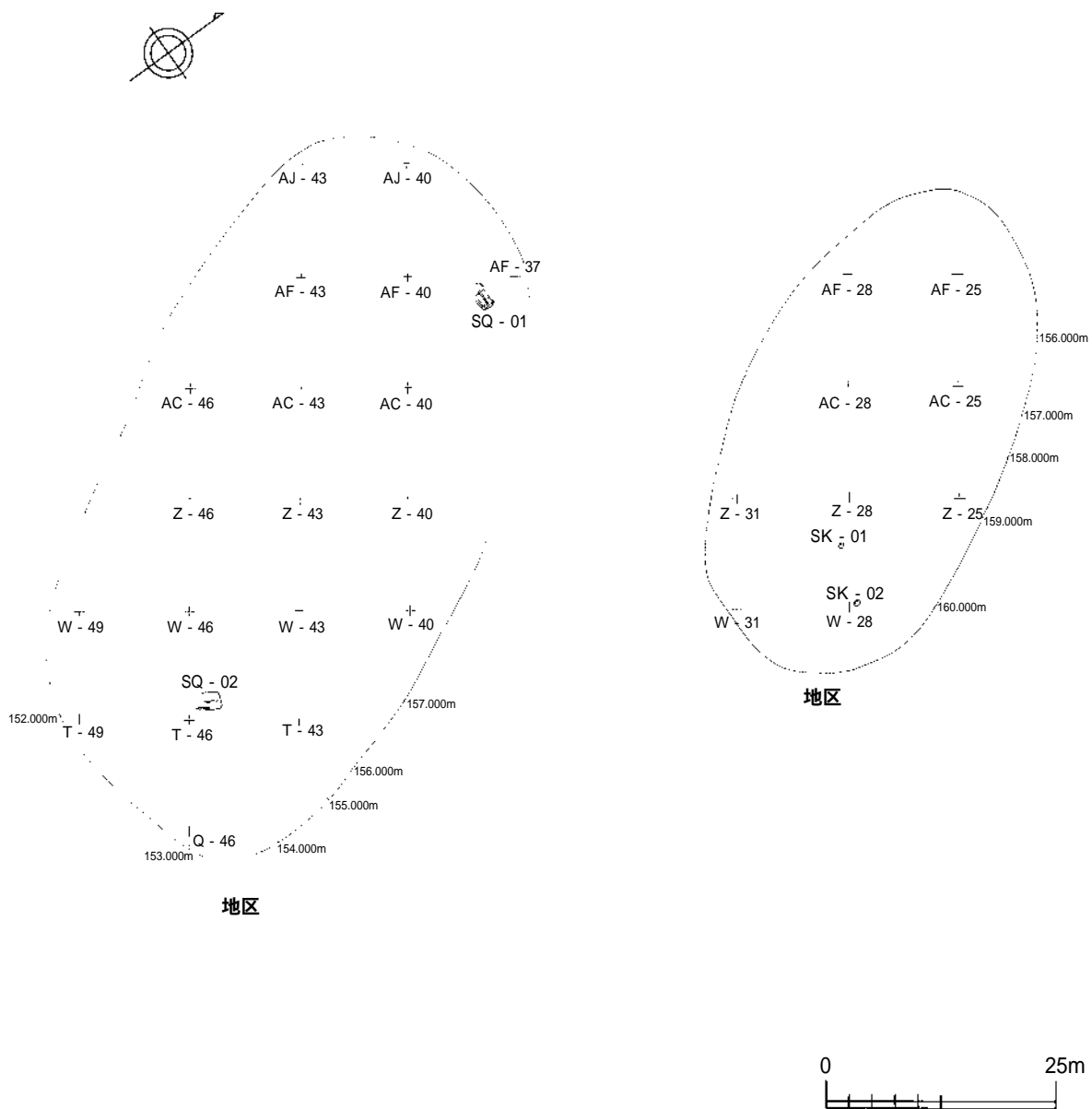
### ③地区



深沢(3)遺跡 基本層序

第I層	10YR2/1	黒色土	草木混入
第II層	10YR2/1	黒色土	ローム粒微量混入
第III a層	10YR3/3	暗褐色土	炭化粒・炭化物・ローム粒微量混入
第III b層	10YR3/2	黒褐色土	10YR3/3暗褐色土ブロック(φ30~50mm)局所的に少量、ローム粒・炭化物微量混入
第III c層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物微量混入
第IV層	10YR2/1	黒色土	10YR2/3黒褐色土ブロック(φ50mm)局所的に少量、ローム粒微量
第V層	10YR4/4	褐色土	ローム粒少量、炭化粒・炭化物微量混入、漸移層
	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒(φ5~10mm)少量、炭化物少量混入、漸移層
第VI層	10YR5/6	黄褐色土	地山(月見野火山灰層)
第VII層	10YR4/6	褐色土	地山(大谷火山灰層)

## 第7図 基本層序図



第 8 図 遺構・グリッド配置図



第9図 遺構・グリッド配置図

## 第 章 調査成果

### 第 1 節 遺構

#### 1 . 木炭窯・製炭土坑

##### SQ - 01 ( 図版 1 )

[ 位置・確認層 ] AE - 37グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] なし。[ 平面形・規模 ] 奥壁側の炭化室を中心に残存しており、残存部は長方形状を呈する。残存部の長軸幅は〔 240 〕 cm、短軸幅は〔 146 〕 cm、深さは〔 13 〕 cmを測る。[ 底面・地下構造 ] 燃烧部寄りの位置に短軸方向に延びる小ピットがある。規模は110×46× 9 cmを測る。また、煙出部が存在したと考えられる奥壁側の末端の両壁際と中央から幅10～18cm深さ 5 cm前後の排水溝が掘り込まれているが、両壁際部分は削平のため、途中で途切れている。中央部の排水溝は前述の小ピットを切った形で、燃烧部側まで延びている。[ 堆積土 ] 4 層に分層した。第 1 層として取り扱った黒色土は燃烧部の炭化物の堆積層で、廃絶後の埋没過程による堆積土は第 2 層が主体である。第 2 層中には白頭山 - 苦小牧火山灰 ( 以下 B - Tm火山灰 ) が少量混入しているが、二次堆積であると判断される。[ 出土遺物 ] なし。[ 時期 ] B - Tm火山灰が混入している状況から平安時代まで遡る可能性も否定できないが、詳細については不明である。

##### SQ - 02 ( 図版 1 )

[ 位置・確認層 ] T - 45グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] なし。[ 平面形・規模 ] SQ - 01と同様に炭化室のみ残存している。残存部は長方形状を呈している。残存部の長軸幅は、〔 210 〕 cm、短軸幅は〔 170 〕 cmを測るが、炭化物の残存状況から長軸幅に関しては325cm以上の規模であったと推測される。また、深さは〔 15 〕 cmを測る。[ 底面・地下構造 ] 精査した部分から検出されたのは排水溝のみで、東壁際と中央部から検出している。中央部の溝は幅22cm、長さ170cm、深さ 7 cmを測り、壁際のもは、幅10～17cm、長さ〔 170 〕 cm、深さ 4 cmを測る。[ 堆積土 ] 5 層に分層した。いずれも廃絶後の埋没過程に伴う堆積である。[ 出土遺物 ] なし。[ 時期 ] 不明である。

##### SQ - 03 ( 図版 2 )

[ 位置・確認層 ] BA - 42グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] なし。[ 平面形・規模 ] 本遺構は製炭土坑で、平面形は土坑の形状分類でbにあたる。規模は、開口部で長軸幅161 cm、短軸幅98cm、深さ34cmを測る。[ 壁 ] 断面形は土坑の形状分類でbにあたり、壁上部の一部で緩やかに立ち上がる。[ 底面 ] ほぼ平坦で、底面は炭化物層が堆積しており、図示はしていないが、底面の一部は被熱により赤化している。[ 堆積土 ] 4 層に分層した。底面直上に堆積する第 4 層は炭化物層で、直上に堆積している第 3 層は記録として焼土が多量混入している記述が残っているが、写真等の確認により、焼土の堆積が層状に 2 面堆積している箇所が南壁側の方で確認でき、焼成が複数回行われた可能性がある。第 1 層はロームブロックが中～多量に含まれ、伏せ焼きの壁面が倒落したような堆積状況を呈している。[ 出土遺物 ] なし。[ 時期 ] 不明である。

##### SQ - 04 ( 図版 2 )

[ 位置・確認層 ] AX - 49・50 , AY - 49グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] なし。[ 平面形・規模 ] 奥壁側が丘陵の頂部にあたり、精査時点で上端部が削平を受けていたため、煙出部については明瞭でないが、炭化室が長方形状に、燃烧部側が窄まった形状を呈する。規模は残存部で、長軸幅〔 450 〕 cm、短軸幅〔 180 〕 cm、深さ33cmを測る。[ 底面・地下構造 ] 炭化室中央に不



整方形の落ち込みを検出した。規模は128×114×20cmを測る。また、奥壁寄りの位置から不整方形のピットを検出した。規模は55×54×14cmを測る。それ以外にSQ - 02と同様に中央部と側壁寄りの部分から排水溝2条を検出した。中央部の溝は、幅20cm、長さ156cm、深さ4cmを測り、側壁寄りの溝は、幅16cm、長さ198cm、深さ4cmを測る。[堆積土]5層に分層した。燃焼部側に堆積する第5層はローム質で、構築材の崩落の可能性を有している。また、図中には記載されていないが、焼土層が確認されている。[出土遺物]堆積土中から縄文土器が混入して出土した。[時期]遺構に帰属すると考えられる出土遺物は認められず、第3層から出土した炭化材に対する放射性炭素年代測定の結果(第章参照)は補正年代値でB.P.820±30年という年代値が得られており、暦年補正後の年代を適用すると13世紀前半～中頃という年代観を得ている。

SQ - 05 (図版3)

[位置・確認層]BB - 46・47, BC - 46・47グリッドに位置する。第層上面において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]削平のため、詳細は不明であるが、残存部の形状は長方形を呈していたものと推測される。南西側が燃焼部にあたり、長軸幅は、奥壁側から燃焼部の先端までの残存規模で、[550]cm、短軸幅は北西側の壁が欠落しているため詳細は不明であるが、現存長で[198]cm、深さは[9]cmを測る。[底面・地下構造]残存部の状況として壁際から小ピットが8基検出しており、他の木炭窯に比べ構造が異なっている。また、燃焼部についても土坑状に掘り込みが行われており、その中央部には横長の浅いピットがさらに掘りこまれている。[堆積土]4層に分層した。第4層は燃焼部の堆積層で、廃絶後の埋土は第1～3層があたる。[出土遺物]堆積土中から縄文土器が混入して出土した。[時期]SQ - 04と同様遺構に帰属した遺物が認められず、燃焼部の堆積層から出土した炭化材に対する放射性炭素年代測定の結果(第章参照)は補正年代値でB.P.780±30年という年代値が得られており、暦年補正後の年代を適用すると13世紀前半～後半という年代観を得ている。窯の構造が壁際に柱穴を持ち、比較的大型な点が本調査で検出した他の木炭窯と構造的に異なっており、同様に大型なタイプであるが壁柱穴が認められないSQ - 11の方が年代的に古い値がでていることから、時期的に構造の差異が生じている可能性がある。

SQ - 06 (図版4)

[位置・確認層]AX - 48グリッドに位置する。第層上面において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]削平と風倒木による影響で残存状況が悪く、不整形を呈している。ただし、炭化室部分は平行な長方形を呈しており、元々はしっかりした形状であった可能性もある。残存値で長軸幅312cm、短軸幅140cm、深さ16cmを測る。[底面・地下構造]燃焼部と想定される北側の部分には不整形の掘り込みが認められ、規模は142×96×24cmを測る。また、炭化室の西壁際には排水溝が幅12cm、長さ47cm、深さ4cmの規模で確認された。[堆積土]5層に分層したが、第4・5層は風倒木に近接した落ち込みの堆積土で直接本遺構には関連づけられないため、本遺構に介在する土層は第1～3層である。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SQ - 07 (図版4)

[位置・確認層]AV - 57・58グリッドに位置する。第層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]南側が削平と根による影響のため詳細は不明であるが、残存部の形状は不整長方形を呈する。規模は長軸幅[220]cm、短軸幅180cm、深さ10cmを測る。[底面・地下構造]南側の焼土の堆積層が落ち込んだ形状を呈しており、燃焼部がこの位置に該当する可能性がある。そのように仮定した場合、他の木炭窯とは異なる小型の形状の窯跡であるか、北側の削平面に構造が延びる可能性もある。類似した形状を呈するSQ - 12の焼土検出状況と炭化物検出状況を確認すると削平面に延びた可能性が

強い。[堆積土] 5層に分層した。分層した中で、第1層と第3・4層はSD - 03に平行する削平の落ち込み(道跡)の影響層で本遺構に直接介在しない。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

## SQ - 08 (図版 5)

[位置・確認層] AN - 47・48, AO - 50グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、燃烧部および煙出部も残存している。規模は長軸幅572cm、短軸幅210cm、深さ50cmを測る。煙出部は奥壁中央部から30cm突出した形で構築されていた。[底面・地下構造] 燃烧部に90×73×18cmの土坑状の落ち込みと舌状に張り出す突出部を検出した。舌状に延びる部分については土層堆積から掘り方と判断できる。また、炭化室からその土坑へ向かって幅21cm、長さ363cm、深さ7cmの排水溝とさらにその排水溝を切る形で幅4~5cm、長さ35~100cm、深さ4~10cmの細い溝が断続的に3列掘り込まれていた。[堆積土] 7層に分層した。前述した舌状の張り出し部に堆積する第7層は掘り方に相当し、燃烧部の落ち込みの土坑についても焼土の堆積状況を踏まえると操業時点では閉口していたものと判断される。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

## SQ - 09 (図版 6)

[位置・確認層] AL - 55・56グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[重複] 平面形および堆積土から本遺構は重複する2基の遺構である可能性があり、第4・8層が切られている側の堆積層にあたる。[平面形・規模] 本遺構は製炭土坑で、平面形は土坑の形状分類でeにあたる。規模は、開口部で長軸幅145cm、短軸幅83cm、深さは36cmである。また、切られている土坑の平面形はeで、規模は、長軸幅105cm、短軸幅(70)cmを測る。[壁] 断面形は土坑の形状分類でdにあたり、緩やかに立ち上がる。また、切られている土坑についても断面形は同様にdである。[底面] 南側がやや窪んだ形状を呈している。切られている側は壁際がやや沈下した形状を呈している。[堆積土] 8層に分層したが、前述のとおり、新旧関係として捉えると6層と2層に分層されることになる。いずれの底面にも炭化物が包含する土層の堆積が認められ、焼成が行われたものと認定できる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

## SQ - 10 (図版 7)

[位置・確認層] AI・AJ・AK - 65グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 燃烧部および煙道部を良好に残存しており、炭化室の形状は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸幅736cm、短軸幅205cm、深さ60cmを測る。[底面・地下構造] 燃烧部の焚口と想定される部分に方形の土坑状の落ち込みを検出した。規模は76×74×10cmを測る。落ち込み部分に炭化物が堆積していることから操業時点でも落ち込みのある形状であったことが考えられる。また、炭化室の北壁には90×80×20cmの不整形の落ち込みを検出した。こちらの方は燃烧部のものとは異なり大谷火山灰層のロームが充填されていることから掘り方であると判断される。また、奥壁の煙出部に近い部分から幅10cm、長さ75cm、深さ2cmの排水溝を検出した。また、煙出部は、平安時代の竪穴住居跡の竈の煙出部に見受けられるピット状の落ち込みが確認できる。[堆積土] 16層に分層した。燃烧部側の第5層にはB - Tm火山灰が混入している。また、局所的ではあるが、天井部であった可能性を有する土層の堆積が認められる(第7・12層)。[出土遺物] なし。[時期] B - Tm火山灰を包含する埋土が含まれるため、平安時代に遡る可能性を有するが、詳細については不明である。

## SQ - 11 (図版 8)

[位置・確認層] AD・AE - 62, AE・AF - 63グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] SQ - 10とは異なり煙出部が突出しておらず、燃烧部のみが舌状に延びた形状を呈する。炭化室の形状は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸幅695cm、短軸幅207cm、深さ51

cmを測る。[底面・地下構造] SQ-10と同様に燃焼部に不整形の落ち込みを検出した。規模は126×75×24cmを測る。堆積状況から作業時点で開口していたものと判断される。[堆積土] 14層に分層した。燃焼部側の方がやや複雑な堆積を呈している。燃焼部の炭化物層の直上に堆積する第13層中からB-Tm火山灰層が少量検出した。[出土遺物] なし。[時期] 前述のとおり、B-Tm火山灰が包含する埋土が含まれるため、平安時代に遡る可能性を有するが、堆積土中から出土した炭化材に対する放射性炭素年代測定の結果(第 章参照)は補正年代値でB.P.810±30年という年代値が得られており、暦年補正後の年代を適用すると13世紀前半～中頃という年代観を得ている。

SQ-12(図版6)

[位置・確認層] AD-50グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 削平による影響で詳細は不明であるが、残存部の形状は不整形を呈する。ただし、検出した炭化物範囲・焼土範囲とも落ち込み状の部分以外に北側の部分へ延びているため、元々の規模はさらに延びた形状であったものと推察される。残存部の規模は、長軸幅〔185〕cm、短軸幅〔190〕cm、深さ〔21〕cmを測る。[底面・地下構造] 燃焼部であった可能性を持つ南側の部分から不整形の小ピットを検出した。規模は50×45×8cmを測る。堆積層から掘り方に相当すると判断される。[堆積土] 7層に分層した。第2～6層まで構築材等も含めた燃焼の痕跡を示す土層の堆積が認められ、検出部位が燃焼部に相当する可能性が高いと判断される。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

### 木炭窯に関する小結

本調査で検出した木炭窯は10基で、削平や根による影響で全体形が判別できない資料も数多く存在する。ただし、遺構の配置状況が 尾根のラインにほぼ平行し構築されるもの 斜面に対し垂直に近い形で構築されるものの2パターンに集約され、 については煙出部・奥壁側を東側の山手にあたる側へ向けて構築している。また、 については、斜面の上端に煙出部・奥壁側がなるように構築されている。また、構造に関してしてみるとa=炭化室が短く排水のための掘り方ピットと排水溝を持つ(可能性があるものを含む)タイプ(SQ-01・02・04)とb=伏せ焼き式の木炭窯で、本調査で検出したものは燃焼部さらに煙道部が設けられる発展型のタイプが主体で、燃焼部側に排水の(木酢液等を集水させる)ための掘り方ピットないしは焚口として落ち込みを設けているタイプ(SQ-05・08・10・11〔06・07・12〕)に大別される。さらにbについては煙出部が明確にあるもの(SQ-08・10)と無いもの(SQ-11)に分けられ、SQ-05については他の木炭窯と異なり壁柱穴を有するという特徴を持つ。各構造において時期差あるいは目的とされる木炭の種類が異なる機能差が存在する可能性をもち得ている。機能差については炭化材の樹種の分析資料が充足していないため、具体的検討に至れない。また、時期差については遺構に関連した出土遺物が伴わなかったため、各遺構の詳細な変遷過程について検討することはできないが、第 章に掲載した出土炭化材の放射性炭素年代測定結果の補正年代値を単純に引用するとSQ-04 SQ-11 SQ-05という構造の異なる木炭窯の変遷順となる。しかし、数値の幅がほぼ誤差の範疇にあり危険性を伴うため、青森県内の遺跡における類例の蓄積を待って、今後の研究に委ねることとする。

## 2. 土坑

SK-01(図版9)

[位置・確認層] X-28グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はhで、開口部は長径44cm、底面は長径12cm、深さは70cmである。[壁] 断面形はjで、ほぼ直線的に立ち上がる。[底面] 中央部が低く落ち込む段差が見られる。[堆積土] 黒褐色土が堆積する。

自然堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 02 (図版 9)

[位置・確認層] W - 27グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はeで、開口部は44cm × 32cm、底面は29cm × 12cm、深さは41cmである。[壁]断面形はeで、南西側は緩くオーバーハングし、その他は外側へ緩やかに立ち上がる。[底面]南西側が低く落ち込む段差が見られる。[堆積土] 2層に分層した。暗褐色土主体に堆積し、上部に黒褐色土が堆積する。微量の炭化物を含む、自然堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 03 (図版 9・10)

[位置・確認層] AX - 44グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はhで、開口部は長径134cm、底面は長径185cm、深さは103cmである。[壁]断面形はfで、オーバーハングし袋状を呈する。[底面]おおむね平坦で堅く締まる。北側から南側へ若干の傾斜が見られる。[堆積土] 9層に分層した。堆積土中位はロームが厚く堆積し、堆積土上位、下位もロームを含む。人為体積と思われる[出土遺物]土器は、第9層より第 群土器(図版10 - 1) 第2層より第 群土器(図版10 - 2・3)が出土している。石器は、第2層より石匙が1点(図版10 - 4)出土している。[時期]出土遺物より縄文時代晩期の土坑と思われる。

SK - 04 (図版 9)

[位置・確認層] AY - 44グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はhで、開口部は長径149cm、底面は長径125cm、深さは38cmである。[壁]断面形はa + fで、東壁側がやや直線的に立ち上がる。南側の一部は緩くオーバーハングする。[底面]中央部が若干低く傾斜が見られる。全体としては南側から北側へ若干の傾斜が見られる。[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土主体に堆積し、上位に黄褐色土が堆積する。各層ロームを含む。人為堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 05 (図版 9)

[位置・確認層] AX・AY - 43グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はhで、開口部は長径181cm、底面は長径157cm、深さは41cmである。[壁]断面形はbで、外側へ緩やかに立ち上がる。[底面]中央部が若干低く傾斜が見られる。[堆積土] 6層に分層した。第6層は、ロームを少量含む黒褐色土、第4層はロームを中量含む暗褐色土である。他は褐色土が堆積する。第6層は自然堆積、他は人為堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 06 (図版 9)

[位置・確認層] AX・AY - 45グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はfで、開口部は168cm × 139cm、底面は105cm × 86cm、深さは88cmである。[壁]断面形はcで、北側及び南側は外側広がり立ち上がる。東側及び西側は底面から直線的に立ち上がる。西側から南側の開口部付近は浅い段状を呈する。[底面]若干の起伏が見られる。[堆積土] 2層に分層した。褐色土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 07 (図版 9)

[位置・確認層] AW - 51グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複]なし。[平面形・規模]平面形はhで、開口部は長径114cm、底面は長径120cm、深さは14cmである。[壁]断面形はfで、短くオーバーハングし、袋状を呈する。[底面]中央部が若干高く傾斜が見られる。全体としては、北東側から南西側へ若干の傾斜が見られる。[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土主体に堆積し、ロームを微量含む。自然堆積と思われる。[出土遺物]なし。[時期]不明である。

SK - 08 欠番

SK - 09 (図版11)

[位置・確認層] AX・AY - 48グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はeで、開口部は最長93cm、底面は最長122cm、深さは73cmである。[壁] 断面形はfで、オーバーハングし、袋状を呈する。南側の一部は起伏を有する。[底面] 全体としては、北側から南側へ若干の傾斜が見られる。[堆積土] 4層に分層した。黒色土、黒褐～暗褐色土が堆積し、ローム、炭化物を微量含む。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

SK - 10 (図版11)

[位置・確認層] BR・BS - 51グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はhで、開口部は長径161cm、底面は長径152cm、深さは22cmである。[壁] 断面形はaでほぼ垂直に立ち上がる。[底面] 東側から西側へ若干の傾斜が見られる。南壁側に底面ピットを有する。[堆積土] 黒色土と黒褐色土の混合土が堆積し、ロームを含む。人為堆積と思われる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

SK - 11 (図版11)

[位置・確認層] AU・AV - 58グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はhで、開口部は長径112cm、底面は長径93cm、深さは63cmである。[壁] 断面形はcで、底面から直線的に立ち上がり、中位より外側へ若干広がり立ち上がる。[底面] 中央部が低く若干の傾斜が見られる。全体としては北側から南側へ若干の傾斜が見られる。[堆積土] 4層に分層した。第2～4層は、褐色～黄褐色土が堆積し、第1層は、暗褐色土が堆積しロームを少量含む。第1層は自然堆積、第2～4層は人為堆積と思われる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

SK - 12 (図版11)

[位置・確認層] AG・AH - 54グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] 第4号溝と重複し、本遺構が新しい。[平面形・規模] 平面形はeで、開口部は204cm×142cm、底面は118cm×111cm、深さは45cmである。[壁] 断面形はbで、外側へ緩やかに立ち上がる。[底面] 若干の起伏が見られるがおおむねほぼ平坦である。[堆積土] 7層に分層した。黒～黒褐色土主体に堆積し、第2層はロームを多量含む。第3～7層は自然堆積、第2層は人為堆積と思われる。第1層は後世の攪乱とも考えられる。[出土遺物] なし。[時期] SD - 04との重複関係により、平安時代以降と思われる。

SK - 13 (図版11)

[位置・確認層] BH - 32グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はfで、開口部は159cm×127cm、底面は長径182cm、深さは70cmである。[壁] 断面形はfで、オーバーハングし、袋状を呈する。南東側の一部は木根による攪乱を受けている。[底面] ほぼ平坦である。硬く締まる。中央部南側に底面ピットを有する。[堆積土] 9層に分層した。第5、6、9層は崩落土の可能性が考えられる。他は黒褐～褐色土が堆積しロームを含む自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

SK - 14 (図版11)

[位置・確認層] BG・BH - 32グリッドに位置する。第 層において確認した。[重複] なし。[平面形・規模] 平面形はhで、開口部は長径120cm、底面は長径114cm、深さは11cmである。[壁] 断面形はdで、外側へ広がり立ち上がる。[底面] 若干の起伏を有するがほぼ平坦である。[堆積土] 黒褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

### 3 . 溝跡

SD - 01 欠番

SD - 02 欠番

SD - 03 ( 図版12 )

[ 位置・確認層 ] AW - 56 ~ BA - 61グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] なし。[ 平面形・規模 ] 平面形は溝状で、調査区外へ延びている。長さ3120cm、幅64cm、深さは25cmを測る。[ 壁 ] 壁の一部が緩やかに外側へ立ち上がる箇所が見られる。[ 底面 ] 若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。[ 堆積土 ] 基本層序第 層である黒色土が堆積している。[ 出土遺物 ] なし。[ 時期 ] 時期については不明であるが、部分的に平行する落ち込みが認められ尾根に沿った道跡の可能性を有し、堆積土についても基本層序第 層が堆積していることから、比較的新しいものと判断される。

SD - 04 ( 図版12 )

[ 位置・確認層 ] AF - 55 ~ AN - 60グリッドに位置する。第 層上面において確認した。[ 重複 ] SK - 12と重複している。新旧関係は本遺構の方が古い。[ 平面形・規模 ] 平面形は溝状で、蛇行しており一部断続しながら調査区外へ延びている。長さ4080cm、幅80cm、深さは45cmを測る。[ 壁 ] 壁の一部が緩やかに外側へ立ち上がる箇所と段状に立ち上がる箇所が見られる。[ 底面 ] 若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。[ 堆積土 ] 4層に分層した。底面直上に堆積する第4層は砂質土で、その上位に堆積する第3層及び第1層からB - Tm火山灰が確認されている。第3層については流水時に堆積した二次堆積土、第1層については埋没過程に伴う再堆積土であると判断される。[ 出土遺物 ] 本調査時には出土していないが、試掘調査時点で黒色土器椀ないしは小甕の碎片と土師器甕底部片が出土している。[ 時期 ] 堆積土中から土師器片が出土している点とB - Tm火山灰が堆積していることを踏まえると10世紀前半～中葉に機能した可能性がある。

## 第 2 節 遺物

### 1 . 土器

本遺跡で出土した土器は、少量であり、破片数も2ヵ年の合計で遺構内外併せて約60点に留まる。分布状況は散発的であるが、調査区東側から西側への丘陵上がやや多く縄文時代中期、後期、晩期の破片が出土している。その他、調査区南側の斜面下においても散発的に出土する土器片を確認したが、沢上の地形の影響が取り上げることができないほど残存状態が悪く、施文等も確認できなかったものがあつたことを述べておく。

第 群土器 縄文時代前期の土器 ( 図版 3 - 1、図版13 - 1 ~ 16 )

図版 3 - 1、図版13 - 1 ~ 6 は、口縁部片である。口縁部にR、L、LRを横位、斜位、縦位に押圧している。1は、狭い幅の口縁部を有する。胴部最上部の施文が認められるものは、LRを横位に回転施文している。胎土には微量の植物繊維を含む。縄文時代前期末葉の円筒下層d<sub>1</sub>式土器と思われる。7 ~ 13は、胴部片、図版13 - 15・16は、底部片である。7、8は、胴上部の破片と思われ上部に結束第一種、結節回転文を横位に施文し、下部に縦走するRLR縄文や縦位の絡糸体回転文を施文している。9 ~ 13、15、16も同様に縦走するRLR縄文及び縦位の絡糸体回転文を施文している。14は、口縁～胴部片である。口縁部に結束第一種を横位に、胴部に縦走するRLR縄文を施文している。7 ~ 16は、多少はあるが胎土

に植物繊維を含む。また、後述する縄文時代中期の土器と比較すると細めの縄で精緻であり、1～6も同様である。7～16は、おおむね円筒下層d式土器と思われる。

第 群土器 縄文時代中期の土器(図版13・14 - 17～25)

17～19は、外側に大きく開く器形を有する口縁部片である。いずれも細めの隆帯により装飾され、隆帯外面にはLやRの押圧による刻目が見られる。また、馬蹄状等の連続した押圧が見られる。胎土には植物繊維は混入していない。縄文時代中期前葉の円筒上層b式土器と思われる。20～22は、胴部片である。太目の前々段多糸の縄による結束第一種を横位に施文している。胎土に植物繊維は混入していない。おおむね縄文時代中期前葉の土器と思われる。23～25は、同一個体の胴部、底部片である。摩滅により施文は不明である。胎土は、他と異なり珪藻土に近いものと思われる。胎土に植物繊維を含まず。一応本群に含めた。

第 群土器 縄文時代後期の土器(図版14 - 26～39)

26～39は、沈線文と縄文により施文されているものである。26～33は、口縁部片、34～39は、胴部片である。いずれも沈線文と単節縄文が施されている。縄文時代後期初頭の土器と思われる。

第 群土器 縄文時代晩期の土器(図版2 - 1・2、図版10 - 1～3、図版14 - 40～48)

図版2 - 1・2、図版14 - 40～44は、縄文が施文されているもの、図版10 - 1～3、図版14 - 45～48は、無文のものである。図版10 - 2、図版14 - 40・41は、口縁部片である。丸味を帯びる深鉢形の器形を有する。図版10 - 1・3、図版14 - 46は、壺形土器の胴部片である。縄文時代晩期の土器と思われる。

第 群土器 弥生時代の土器(図版14 - 49、50)

49、50は、同一個体と思われる口縁～胴部片及び底部片である。沈線による変形工字文と粘土瘤の貼付文が施文されている。弥生時代の砂沢式土器と思われる。

第 群土器 平安時代の土器(図版14 - 51)

51は、須恵器甕の底部～胴部下半にかけての資料である。外面には焼台痕があり、内面には当て具痕が観察される。外面がタタキ、内面はヘラナデによる調整である。

## 2. 石器(図版10 - 4、図版15・16 - 1～12)

本遺跡からは、石鏃、石匙、石筥、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類、計12点の石器並びに1点の水晶が出土している。遺構内からは石匙1点のみの出土であり、他は遺構外から出土しているがその分布状況は散発的である。1点掲載した水晶は特に加工痕、使用痕等認められないが採集などの可能性も考慮し本項に掲載することとした。

図版15 - 1・2は、有茎凸基の石鏃である。刃部は1が直線的、2は緩やかに外湾している。

図版10 - 4は、縦型の石匙である。側縁が湾曲し先端が鋭く尖る形状である。刃部は背面側に細かい調整が認められる。図版15 - 3は、石筥である。調整に際しては、端部の他は、全体に荒い調整である。図版15 - 4～6は、不定形石器である。刃部調整は、4は、欠損品で不明であるが、5は、端部に、6は、側縁片側に行われている。図版16 - 7～9は、磨製石斧である。7の側縁には擦切痕が認められる。8は、破損後、基部側を敲打により整形し再利用したものと思われる。9は、破損後、基部と破損部の両側が磨石として再利用されている。図版16 - 10・11は、敲磨器類である。10は、おおむね扁平な礫側縁を使用した磨石、11は、楕円形の礫平坦面中央部両側に各1個所の凹痕を有する凹石である。図版16 - 12は、水晶である。特に使用痕、加工痕は認められない。母岩から剥落したままのものとも考えられる。

## 第 章 自然科学分析

### 深沢(3)遺跡から出土した炭化物の年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

深沢(3)遺跡は、小金沢右岸の台地上に位置する。今回の発掘調査により炭窯が検出されており、炭窯内からは製炭した炭化材の一部などと考えられる炭化材が出土している。この炭窯の年代は、古代以降と考えられているが、遺物が出土していないため時代・時期の詳細は不明である。

今回の分析調査では、炭窯内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、炭窯の構築・使用時期に関する資料を得る。

#### 1. 試料

試料は、第4号炭窯(SQ-04)、第5号炭窯(SQ-05)、第11号炭窯(SQ-11)から出土した炭化材各1点、合計3点である。

#### 2. 方法

放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)で行い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用する。なお、測定は、株式会社 加速器分析研究所(IAA)が行った。

#### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果を表1に示す。年代測定値は、770BP~810BP(補正年代780BP~820BP)であった。また、各炭化材については、樹種同定を併せて実施し、樹種を確認した。その結果、全て落葉広葉樹であるが、樹種は炭窯によって異なり、第4号炭窯がコナラ節、第5号炭窯がカエデ属、第11号炭窯がブナ属であった。

表1 放射性炭素年代測定結果

番号	遺構	層位	試料の質	年代	13C	補正年代	Code
1	第4号炭窯	第3層	炭化材(コナラ節)	810 ± 30BP	-23.63 ± 1.19‰	820 ± 30BP	IAAA-11798
2	第5号炭窯	第4層	炭化材(カエデ属)	770 ± 20BP	-23.72 ± 0.97‰	780 ± 30BP	IAAA-11799
3	第11号炭窯	覆土	炭化材(ブナ属)	800 ± 20BP	-23.90 ± 1.04‰	810 ± 30BP	IAAA-11800

1) 年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。

2) 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は<sup>13</sup>Cの値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。

3) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

4) 試料の質の( )内は、炭化材の樹種同定結果。



#### 4. 考察

炭窯の年代測定値は、770BP～810BPで、補正年代では780BP～820BPであった。最も年代が離れている第4号炭窯と第5号炭窯でも、年代差は40年程度である。測定誤差や樹齢による年代誤差等を考慮すれば、3基の炭窯はほぼ同時期に構築・使用されたことが推定される。

各炭窯の年代を推定するため、補正年代を用いてINTCAL98 ( Stuiver et al. , 1998 ) による暦年較正を行った。その結果、第4号炭窯 ( 補正年代820BP ) は、中央値の交点がAD1220で、誤差を含めるとAD1210～1260となる。第5号炭窯は、中央値の交点がAD1265で、誤差を含めるとAD1225～1280となる。第11号炭窯は、中央値の交点がAD1225 , 1230 , 1240で、誤差を含めるとAD1215～1265となる。この結果から、各炭窯は、鎌倉時代頃に構築・使用されたことが推定される。

年代測定を行った炭窯内で他にも炭化材があれば、今後それらの年代測定を行い、各炭窯の年代をさらに詳細に検証したい。

#### 引用文献

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. ( 1998 ) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## まとめ

深沢(3)遺跡は、青森市大字駒込字深沢に所在する遺跡である。

本遺跡は、平成13年度に青森市教育委員会が実施した市内遺跡発掘調査事業における試掘調査で新たに登録された遺跡で、青森市南東部月見野森林公園内の東から西側に伸びる丘陵、標高約145～160mに位置する。丘陵の南北両側は沢状の地形となっている。

発掘調査は、東北新幹線建設工事に係る排土置場造成工事予定地に対して、平成13、14年度の2カ年に渡り調査面積14,860㎡の発掘調査を実施した。

調査の結果、炭窯10基、製炭土坑・土坑15基、溝跡2条を検出した。出土遺物は、縄文時代前期から晩期、弥生時代、平安時代の土器や石器が出土している。

炭窯は、調査区の丘陵部の尾根に近い部分及び南傾する斜面上に広がり構築されており、燃烧部及び炭化室及び煙道部が検出された窯跡が2基確認され、燃烧部の地下構造には湿気抜き土坑状の掘り方を持ち、炭化室の中央および側壁際には排水の為に浅い溝が掘られるケースが確認された。一部の炭窯からは縄文土器が紛れ込んで出土しているが、それ以外の具体的共伴遺物と認定できる資料の出土はなく、B-Tm火山灰が堆積土中に混入している遺構も数基存在している。検出した3基から出土した木炭について放射性炭素年代測定を実施したが、その結果、13世紀前半～後半のまとまりのある値で得られた。ただし、調査区から該期に属する遺物の出土は認められないことから、今後検討の余地は残されている。

製炭土坑についても具体的遺物の出土は認められず、具体的帰属時期について迫ることができないが、SQ-03と取り扱った土坑は、ほぼ市内の平安時代の遺跡で検出するタイプであることから平安時代以降に求められる可能性が高いと考えられる。調査区内からも試掘調査では土師器片が、そして今回の調査でも須恵器の体部片が出土していることから、ほぼ平安時代に生活が営まれたことは間違いなさであろう。

土坑は、数基のまとまりが考えられるものもあるが、全体的には丘陵上で散発的に分布している。唯一遺物が出土したSK-03は、おおむね縄文時代晩期、SD-04を切るSK-12は、平安時代以降の時期がそれぞれ想定されるが、他はSK-03と同様フラスコ状を呈するSK-09・13について、縄文時代晩期を推測するに留まり大半は不明である。

土器は、破片数にして約60片と僅かな出土であったが、縄文時代前期末葉、中期前葉、後期初頭、晩期、弥生時代の土器、平安時代の土師器、須恵器が出土している。全体的に散発的な出土であるが、調査区丘陵の標高150m付近では縄文時代中～晩期、標高160m付近では縄文時代前期の分布が若干濃くなるように思われる。

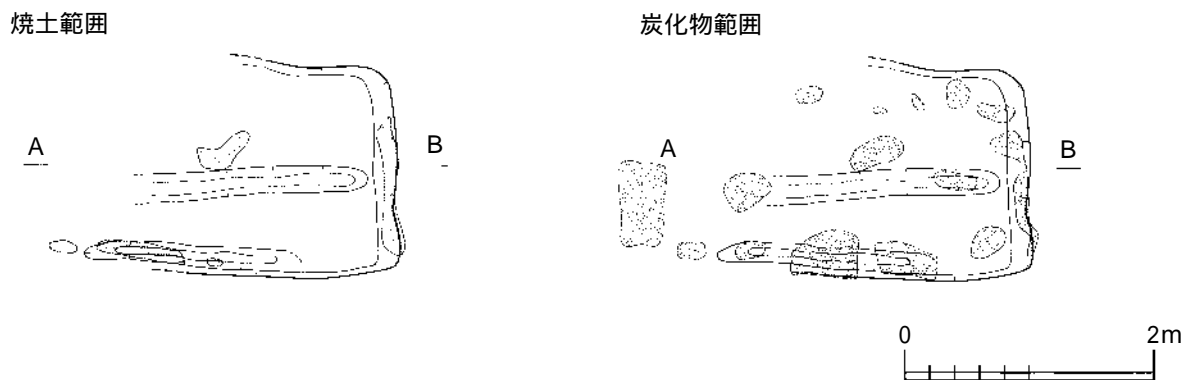
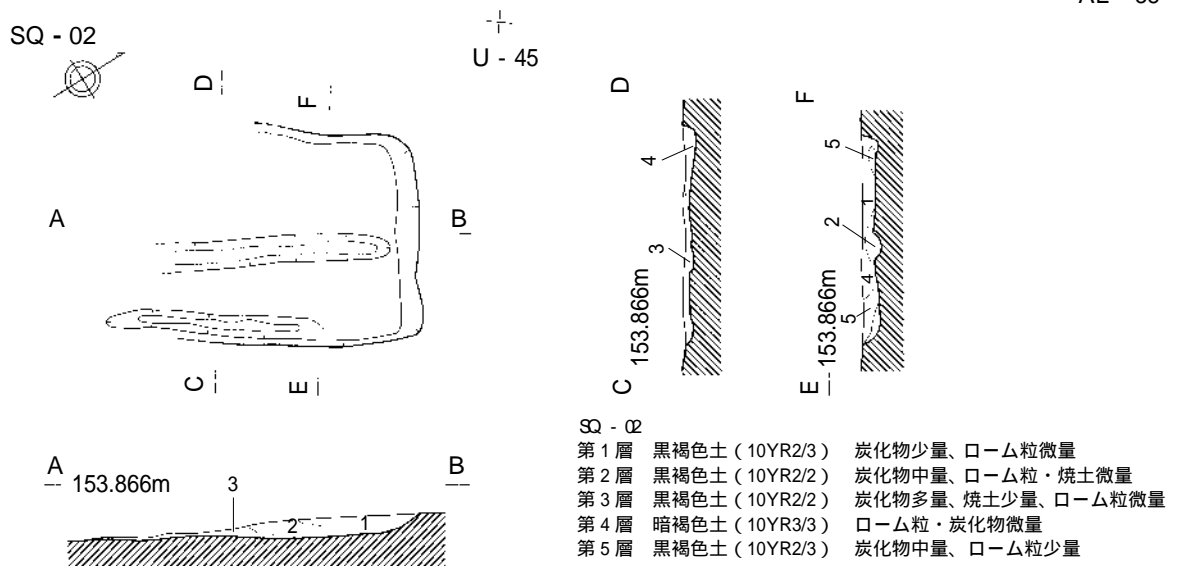
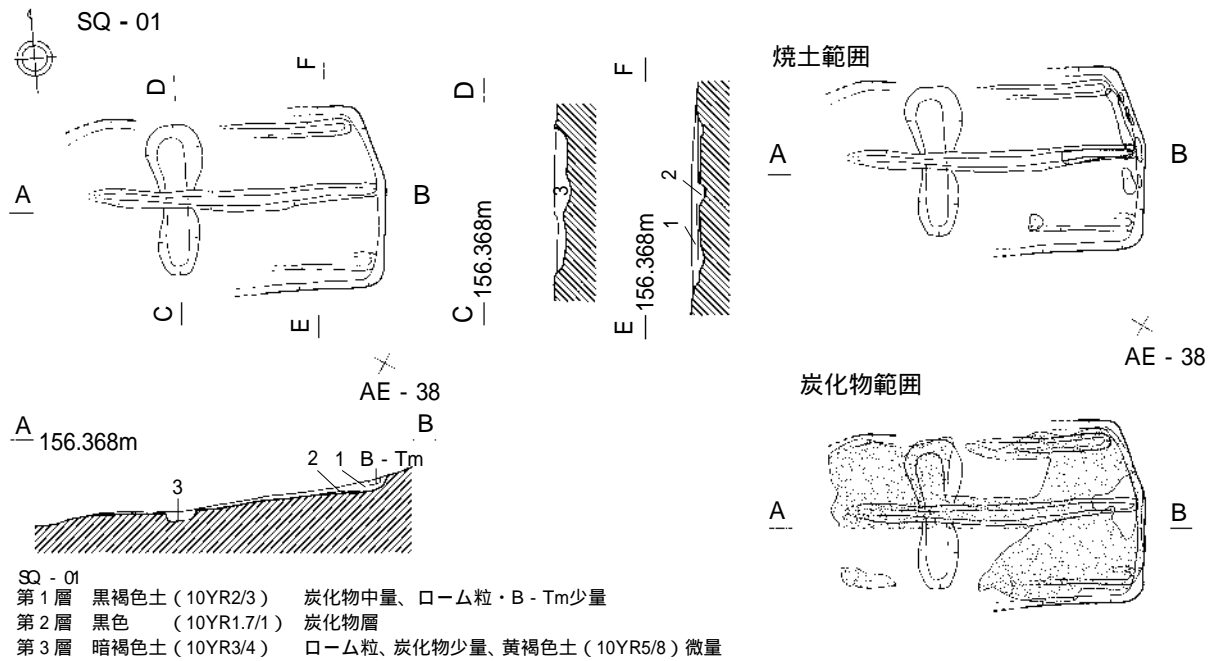
石器は、石鏃、石匙、石筥、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類、計12点が出土している。点数も僅かであり全体に散発的な出土であるが、石鏃2点は、標高160m付近より出土しており、形態的にも縄文時代前期末葉の時期に伴う可能性が高いものと思われる。

縄文時代の本遺跡の様相としては、他遺跡と比較して標高が高い地点である点、検出遺構数や各時期の遺物も少量である点、また、2点のみであるものの石鏃が出土している点などから、集落から離れた狩猟場のような状況を推測するに留まるものと思われる。

最後になりましたが、本遺跡の現地調査並びに整理・報告書作成作業にわたり、ご指導ご協力を賜りました皆様、また現地調査に際しても安全対策等、種々のご配慮をいただきました調査委託者であります日本鉄道建設公団並びに工事関係者の皆様に深くお礼申し上げます。 (小野)

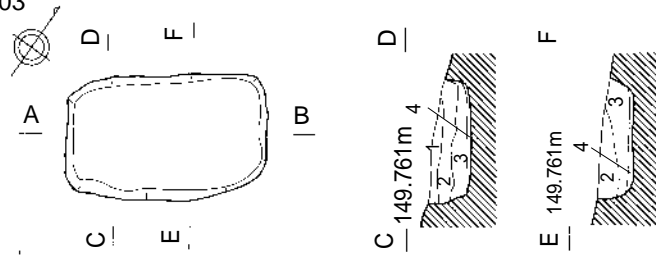
## 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1987 『境関館遺跡』
- 青森県教育委員会 1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』
- 青森県教育委員会 2000 『山下遺跡 ・米山(2)遺跡』
- 青森市教育委員会 1967 『玉清水遺跡調査概報』
- 青森市教育委員会 1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 2001 『野木遺跡発掘調査報告書 』
- 青森市教育委員会 2001 『稲山遺跡発掘調査報告書 』
- 青森市教育委員会 2002 『市内遺跡発掘調査報告書』
- 青森市蚩沢遺跡発掘調査団 1979 『蚩沢遺跡』
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『島田 遺跡発掘調査報告書』
- 宮古市教育委員会 1993 『萩沢 遺跡』
- 宮古市教育委員会 2000 『木戸井内 遺跡・木戸井内 遺跡・上村 遺跡』
- 葛西勳 1969 「青森市沢山1号遺跡調査速報」『月刊考古学ジャーナル』32
- 葛西勳 1978 「青森市月見野遺跡発見の縄文後期の甕棺と人骨」『燃糸文』第7号
- 葛西勳・高橋潤・児玉大成 1996 「青森市沢山(1)遺跡の出土遺物」『燃糸文』第21号
- 桜井清彦・鈴木克彦・高橋龍三郎 1985 「青森市玉清水遺跡発掘調査概報」『月刊考古学ジャーナル』252

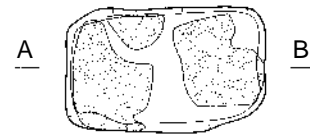


图版 1 SQ

SQ - 03

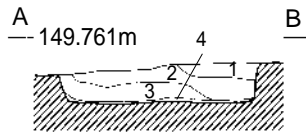


炭化物範囲



BA - 42

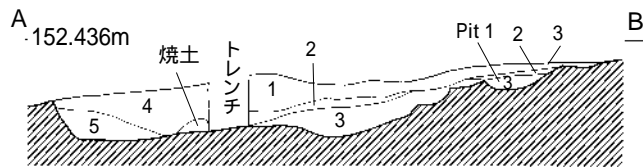
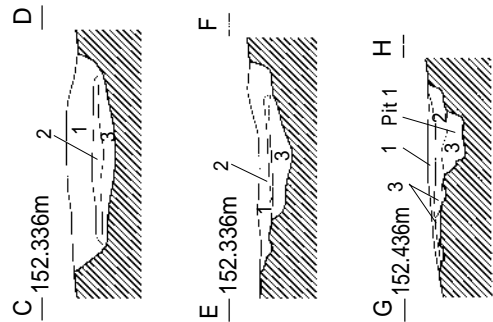
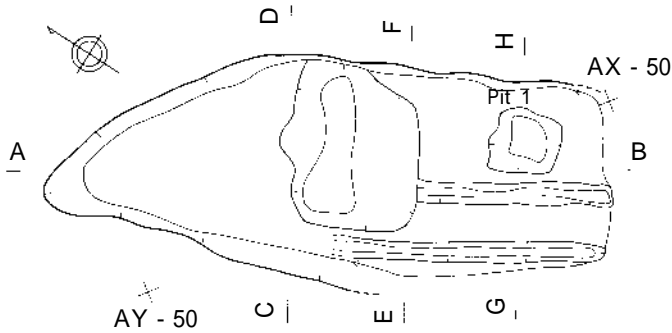
BA - 42



SQ - 03

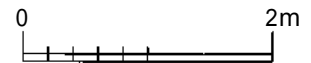
- |     |                 |                      |
|-----|-----------------|----------------------|
| 第1層 | 黒褐色土 (10YR2/3)  | ローム粒・ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 第2層 | 黒色土 (10YR1.7/1) | ローム粒中量、炭化物微量         |
| 第3層 | 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 炭化物・焼土多量、パミスブロック少量   |
| 第4層 | 黒色 (N1.5/0)     | 炭化物層                 |

SQ - 04

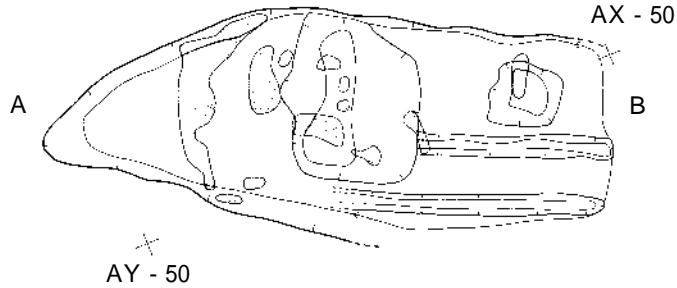


SQ - 04

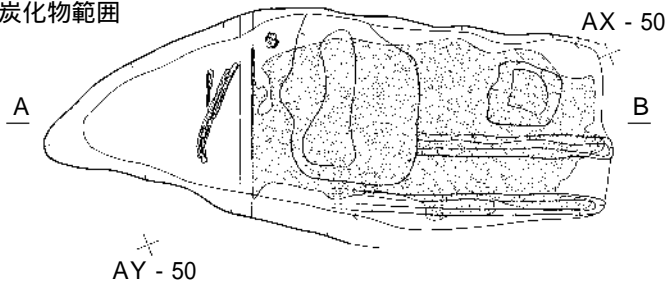
- |     |                |                    |
|-----|----------------|--------------------|
| 第1層 | 黒褐色土 (10YR2/2) | ローム粒・炭化物少量         |
| 第2層 | 黒色土 (10YR2/1)  | 炭化物多量              |
| 第3層 | 暗褐色土 (10YR3/3) | ローム粒中量、焼土少量、黄褐色土微量 |
| 第4層 | 暗褐色土 (10YR3/4) | 褐色土中量、ローム粒・黒色土少量   |
| 第5層 | 褐色土 (10YR4/6)  | ローム粒少量、黒色土微量       |



焼土範囲

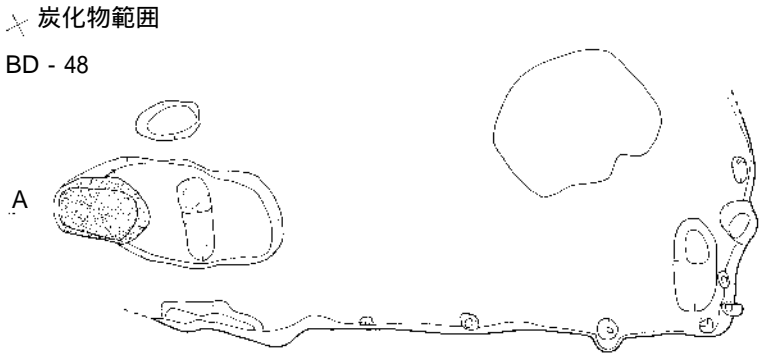
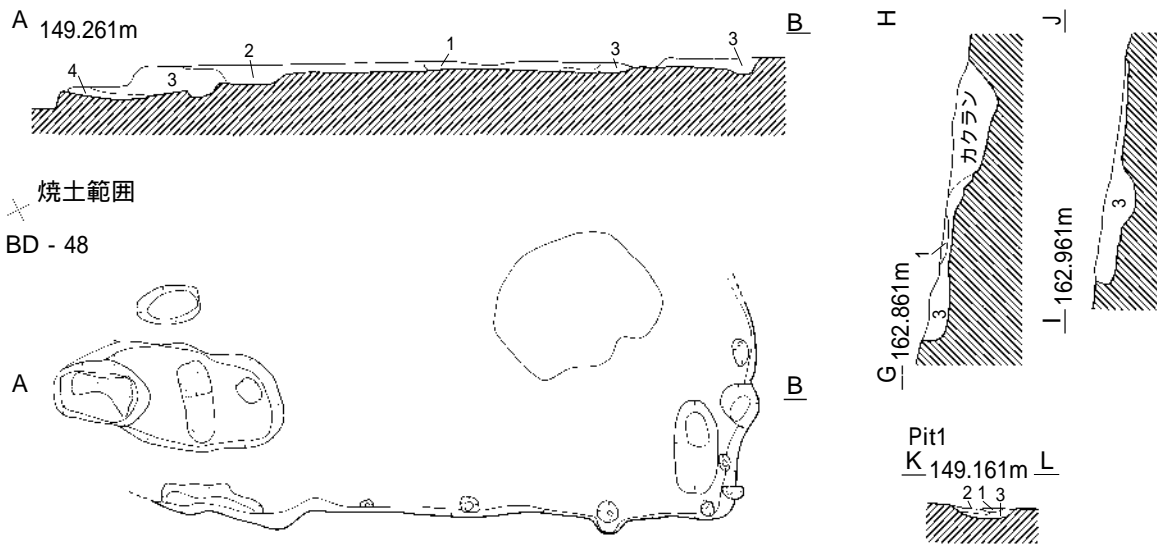
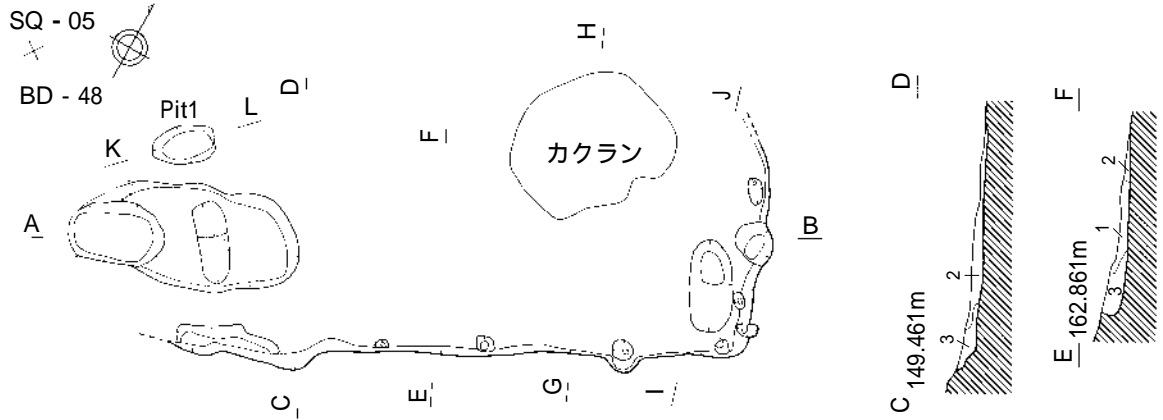


炭化物範囲



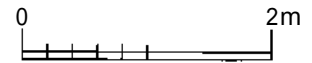
SQ - 04 出土遺物





- SQ - 05
- 第1層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物少量、ローム粒・焼土微量
  - 第2層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物少量、焼土微量
  - 第3層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物中量
  - 第4層 黒色 (N1.5/0) 炭化物層

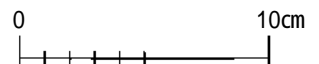
- SQ - 05 内 Pit1
- 第1層 褐色土 (7.5YR4/4) 焼土層
  - 第2層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物少量、ローム粒微量
  - 第3層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物・焼土少量、ローム粒微量



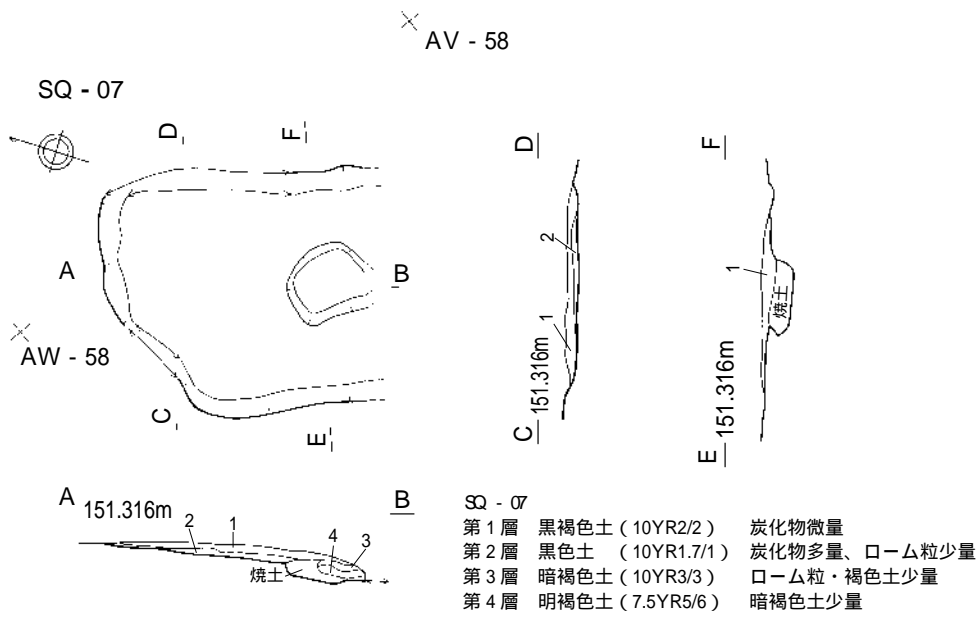
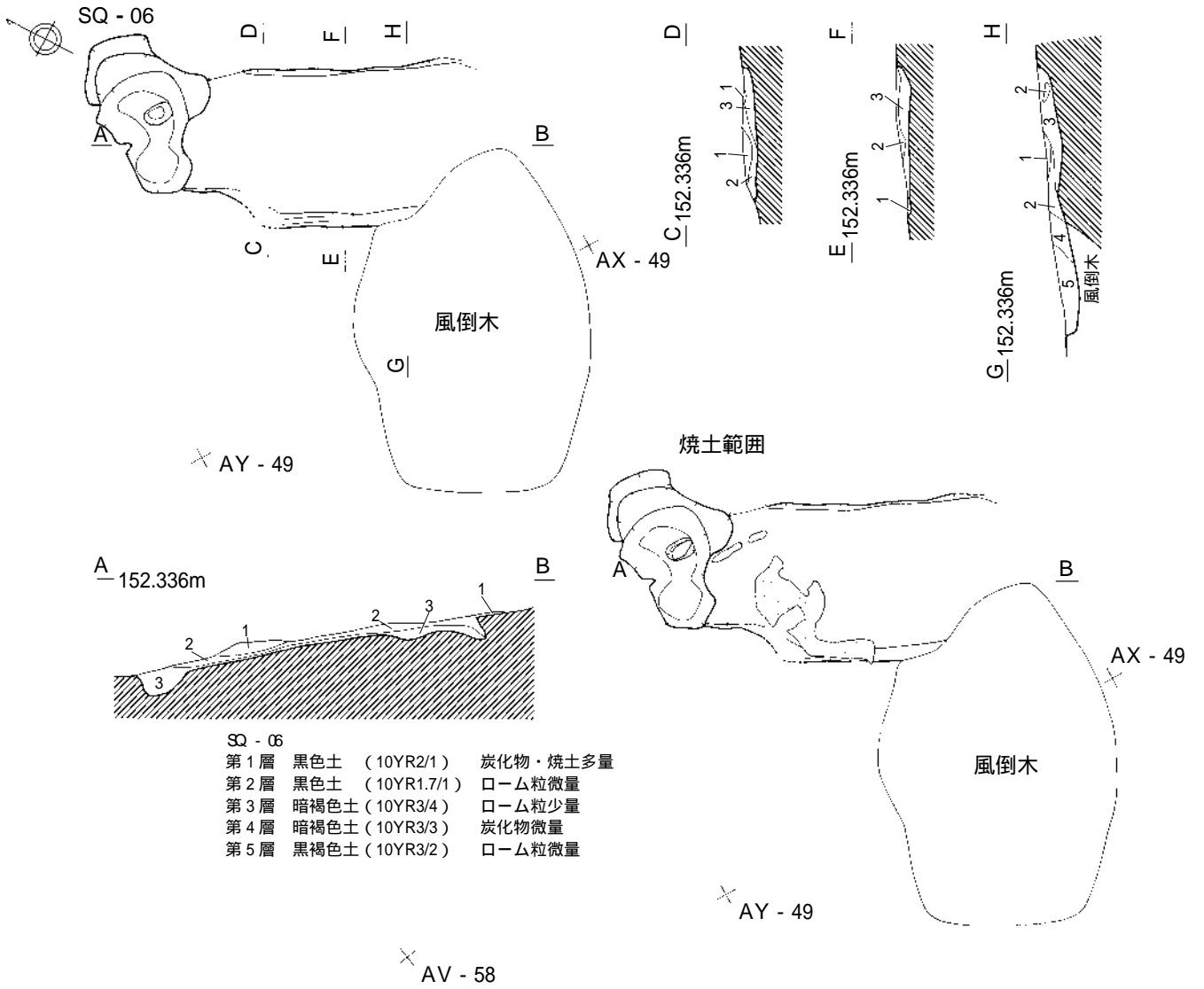
SQ - 05 出土遺物



1

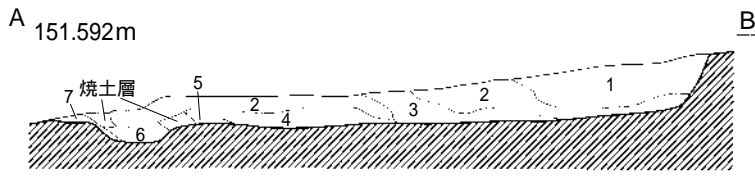
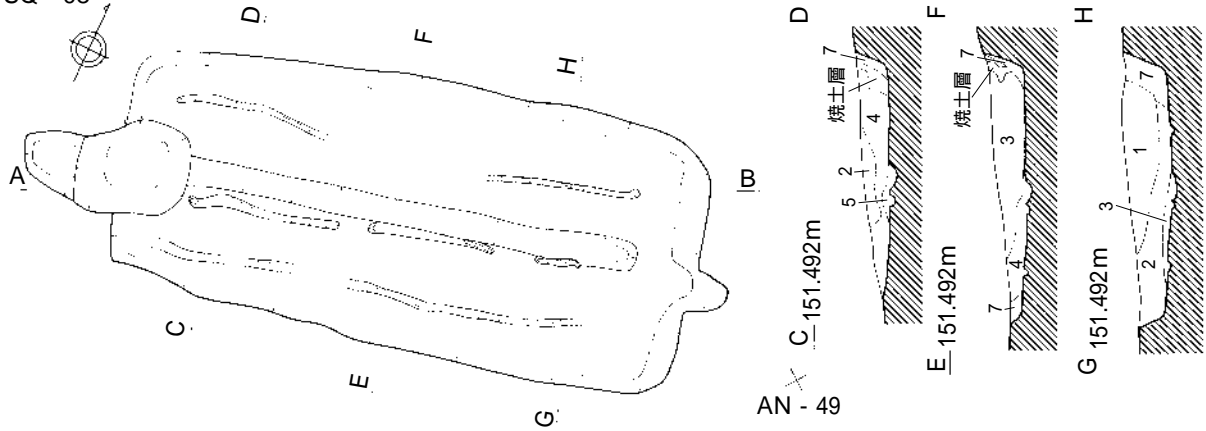


図版 3 SQ



图版 4 SQ

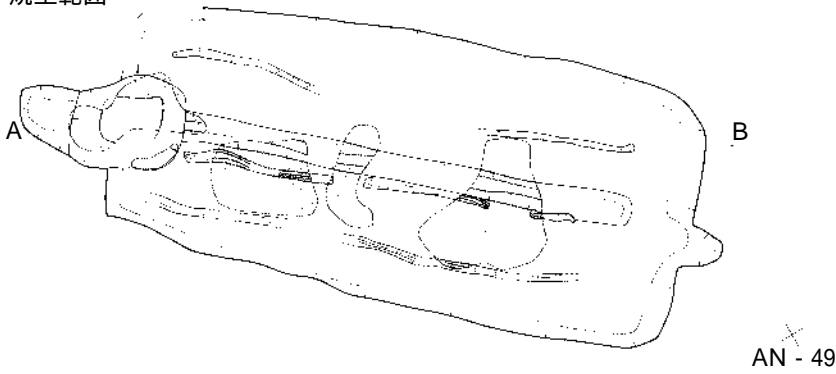
SQ - 08



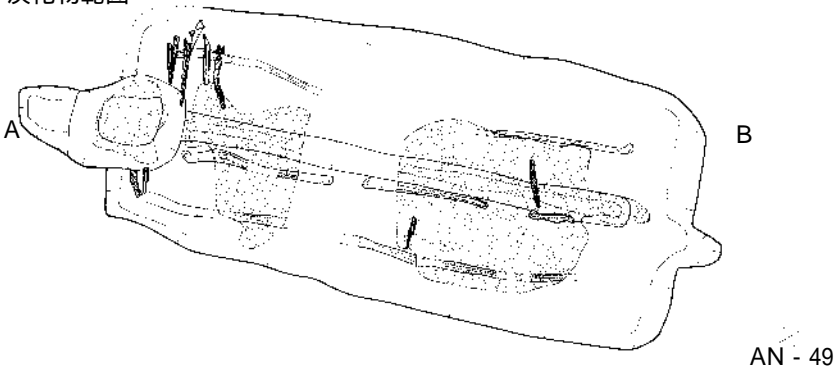
SQ - 08

- 第1層 黒褐色土 (10YR2/3) と褐色土 (10YR4/4) との混合土 ローム粒・炭化物中量
- 第2層 褐色土 (10YR4/4) ローム粒多量、炭化物中量、焼土少量
- 第3層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物多量、焼土少量
- 第4層 黒褐色土 (10YR2/3) 黒色土中量、ローム粒・炭化物微量
- 第5層 黒色土 (10YR2/1) ロームブロック多量、炭化物中量
- 第6層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物中量、焼土少量
- 第7層 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒少量

焼土範囲



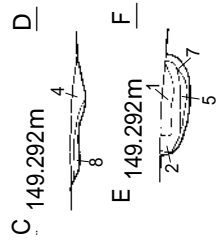
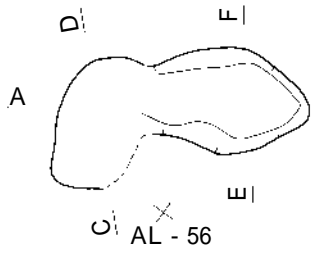
炭化物範囲



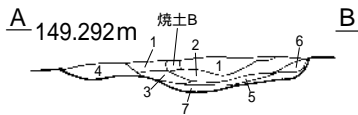
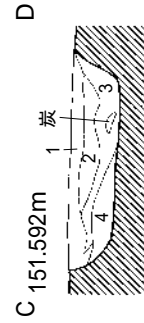
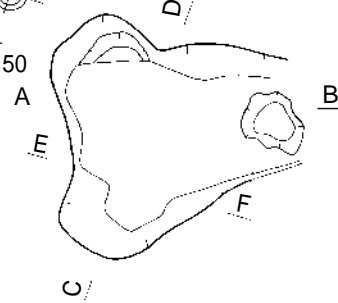
図版 5 SQ



SQ - 09



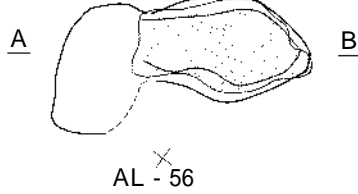
SQ - 12



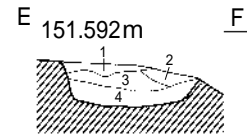
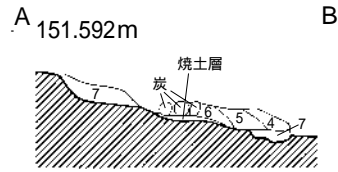
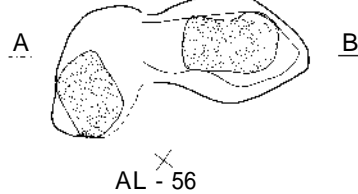
SQ - 09

- 第1層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量、炭化物・焼土微量
- 第2層 赤褐色土 (5YR4/8) 焼土層 黒褐色土少量
- 第3層 褐色土 (7.5YR4/4) 焼土多量、ローム粒・炭化物中量
- 第4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒中量、炭化物・焼土微量
- 第5層 黒色 (10YR1.7/1) 炭化物層
- 第6層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土少量
- 第7層 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒少量、炭化物・焼土微量
- 第8層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物多量、ローム粒中量

焼土範囲



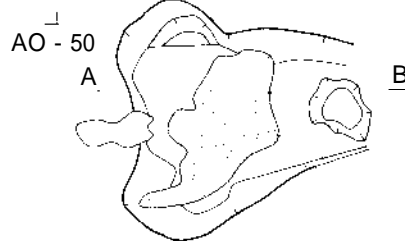
炭化物範囲



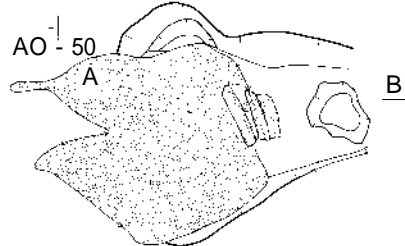
SQ - 12

- 第1層 黒色土 (7.5YR2/1)
- 第2層 黒色土 (10YR2/1) 焼土多量、炭化物少量
- 第3層 黒色 (N2/0) 炭化物層 ローム粒・焼土微量
- 第4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
- 第5層 黒褐色土 (10YR2/3) ロームブロック少量
- 第6層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土ブロック多量、炭化物少量
- 第7層 褐色土 (7.5YR4/4) ロームブロック中量

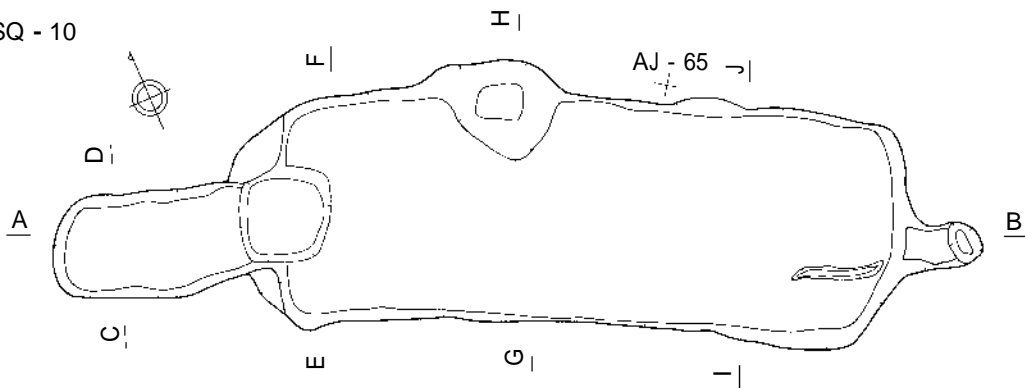
焼土範囲



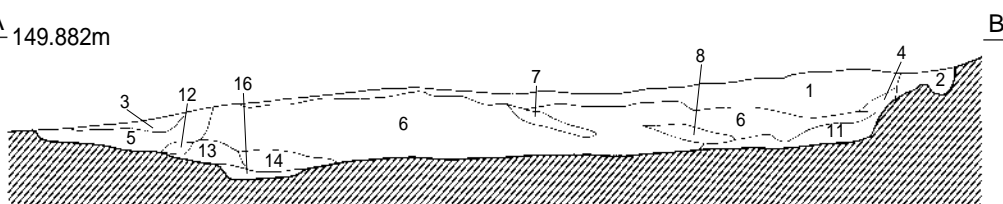
炭化物範囲



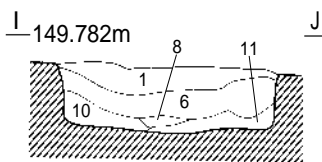
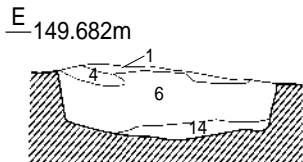
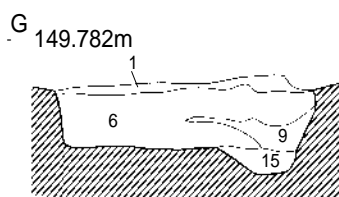
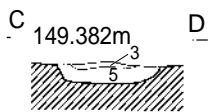
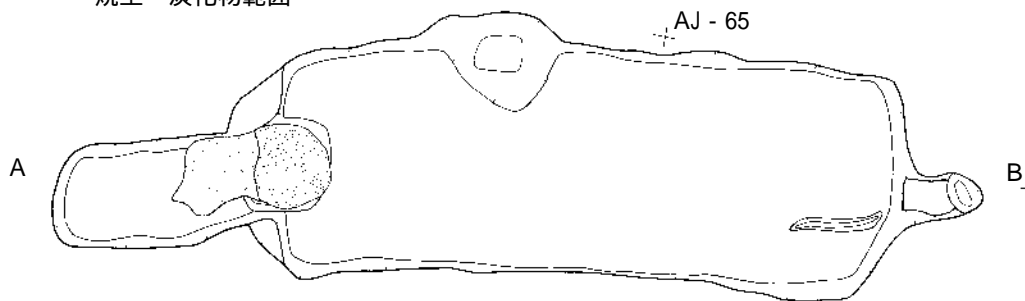
SQ - 10



A 149.882m

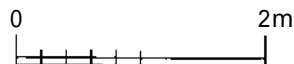


烧土・炭化物範囲



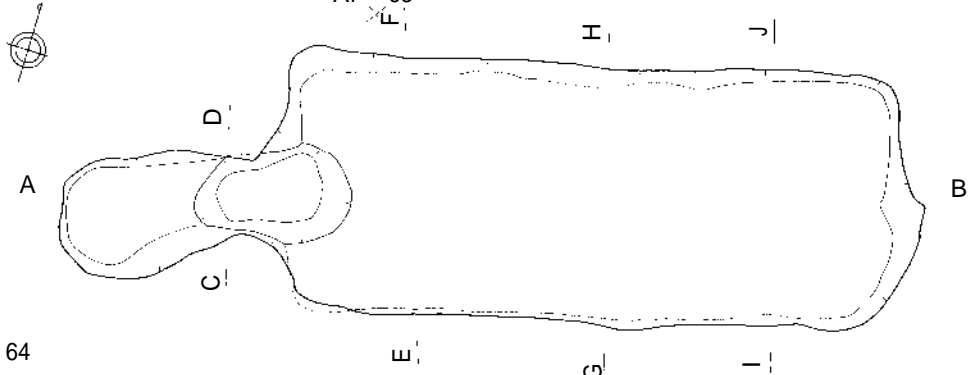
SQ - 10

- |      |                 |              |
|------|-----------------|--------------|
| 第1層  | 黑褐色土 (10YR2/2)  | 口-ム粒少量、炭化物微量 |
| 第2層  | 暗褐色土 (10YR3/4)  | 口-ム粒少量       |
| 第3層  | 暗褐色土 (10YR3/3)  | 口-ム粒中量       |
| 第4層  | 暗褐色土 (7.5YR5/6) |              |
| 第5層  | 黑褐色土 (10YR2/2)  | 口-ム粒・B-Tm微量  |
| 第6層  | 黑褐色土 (10YR2/2)  | 炭化物中量、口-ム粒少量 |
| 第7層  | 褐色土 (10YR4/4)   | 口-ム粒多量、炭化物微量 |
| 第8層  | 黑褐色土 (10YR3/2)  | 口-ム粒多量、炭化物少量 |
| 第9層  | 黑褐色土 (10YR3/2)  | 口-ム粒・炭化物微量   |
| 第10層 | 暗褐色土 (10YR3/3)  | 口-ム粒多量       |
| 第11層 | 黑褐色土 (10YR3/2)  | 炭化物多量、口-ム粒微量 |
| 第12層 | 褐色土 (10YR4/6)   | 烧土层 炭化物微量    |
| 第13層 | 黑褐色土 (10YR3/2)  | 炭化物・烧土微量     |
| 第14層 | 黑色土 (10YR1.7/1) | 口-ム粒・炭化物少量   |
| 第15層 | 褐色土 (10YR4/4)   | 口-ム層 炭化物微量   |
| 第16層 | 黑色 (N2/0)       | 炭化物層         |

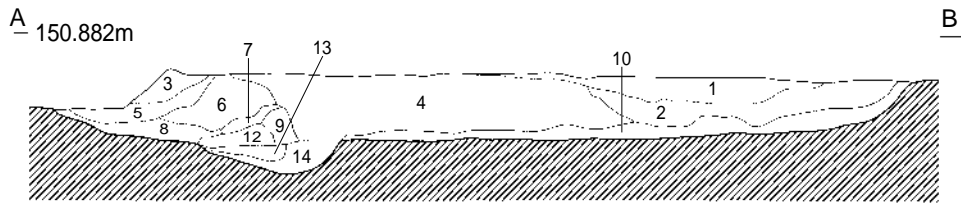


図版 7 SQ

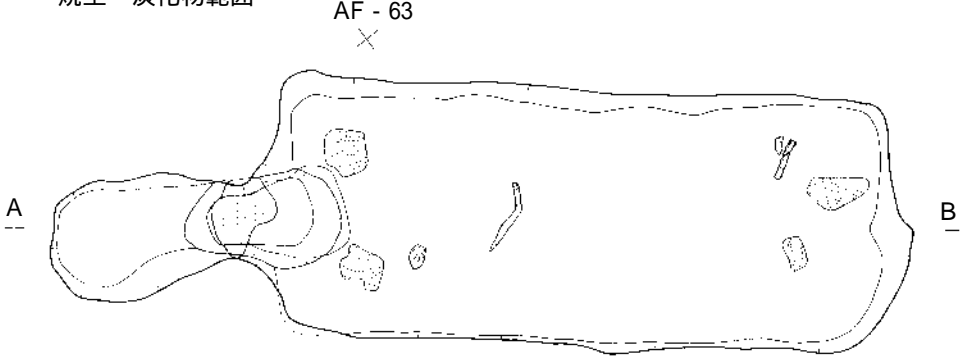
SQ - 11



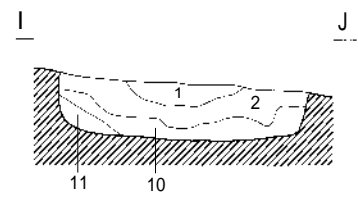
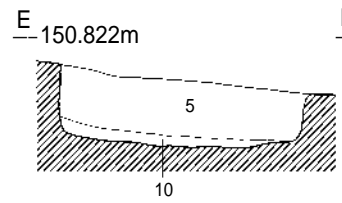
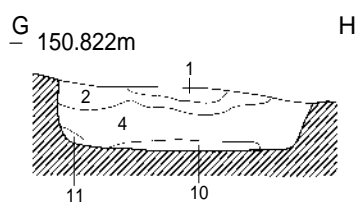
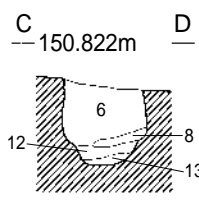
AF - 64



烧土・炭化物範圍



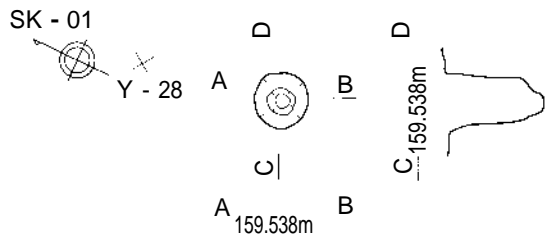
AF - 64



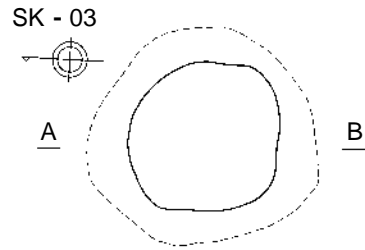
- SQ - 11
- |      |                 |                |
|------|-----------------|----------------|
| 第1層  | 黑色土 (10YR2/1)   | 口-△粒・炭化物微量     |
| 第2層  | 暗褐色土 (10YR3/4)  | 口-△粒・炭化物少量     |
| 第3層  | 黑褐色土 (10YR3/2)  | 口-△粒少量         |
| 第4層  | 黑色土 (10YR2/1)   | 口-△粒・炭化物中量     |
| 第5層  | 暗褐色土 (10YR3/3)  | 口-△粒少量         |
| 第6層  | 黑褐色土 (10YR2/2)  | 口-△粒中量         |
| 第7層  | 黑褐色土 (10YR2/2)  | 烧土多量、炭化物微量     |
| 第8層  | 暗褐色土 (10YR3/4)  | 口-△粒少量         |
| 第9層  | 黑色土 (10YR2/1)   | 炭化物多量、灰微量      |
| 第10層 | 黑色土 (N2/0)      | 炭化物多量、灰微量      |
| 第11層 | 暗褐色土 (10YR3/3)  | 炭化物少量、口-△粒微量   |
| 第12層 | 明褐色土 (7.5YR5/6) | 烧土层 炭化物微量      |
| 第13層 | 黑褐色土 (10YR3/2)  | B - Tm少量、炭化物微量 |
| 第14層 | 黑色 (N2/0)       | 炭化物層 黑褐色土微量    |



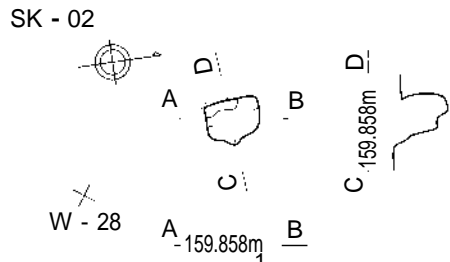
图版 8 SQ



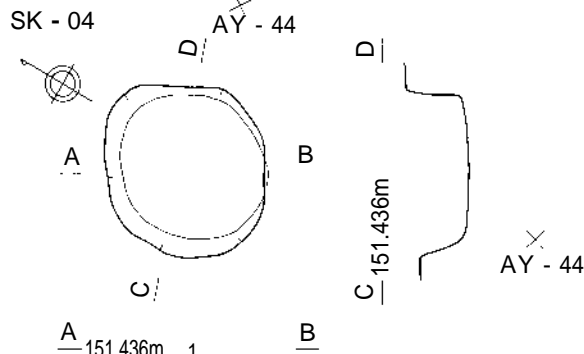
SK - 01  
第1層 黒褐色土 (10YR3/2) □-△粒少量



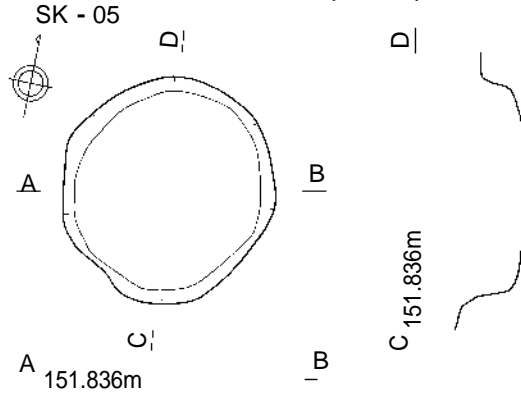
SK - 03  
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) □-△粒中量  
第2層 黒褐色土 (10YR2/3) □-△粒中量、炭化物微量  
第3層 暗褐色土 (10YR3/3) □-△粒少量  
第4層 明褐色土 (7.5YR5/8)  
第5層 黒褐色土 (10YR2/2) □-△粒中量  
第6層 明褐色土 (7.5YR5/8)  
第7層 黄褐色土 (10YR5/6)  
第8層 褐色土 (10YR4/4) □-△粒少量  
第9層 黒褐色土 (10YR2/3) □-△粒中量



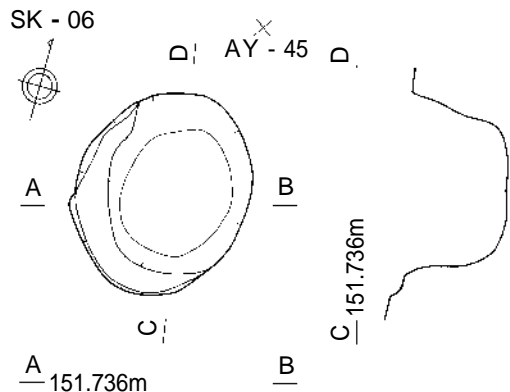
SK - 02  
第1層 黒褐色土 (10YR3/2) □-△粒少量、炭化物微量  
第2層 暗褐色土 (10YR3/4) □-△粒少量、炭化物微量



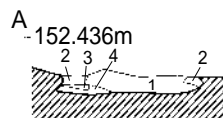
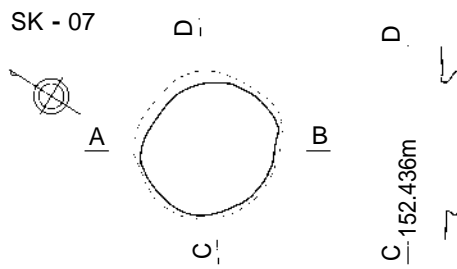
SK - 04  
第1層 黄褐色土 (10YR5/6) 暗褐色土中量  
第2層 黒褐色土 (10YR2/3) □-△粒中量  
第3層 黒褐色土 (10YR2/2) □-△粒少量



SK - 05  
第1層 褐色土 (7.5YR4/4)  
第2層 にびい黄褐色土 (10YR5/4) □-△粒中量  
第3層 褐色土 (10YR4/6)  
第4層 暗褐色土 (10YR3/4) □-△粒中量  
第5層 褐色土 (10YR4/4) □-△粒・黄褐色土少量  
第6層 黒褐色土 (10YR2/3) □-△粒少量



SK - 06  
第1層 褐色土 (10YR4/6) □-△粒中量、黄褐色土少量  
第2層 褐色土 (10YR4/6) □-△粒多量



SK - 08  
第1層 黒褐色土 (10YR2/2) □-△粒微量  
第2層 暗褐色土 (10YR3/3) □-△粒少量  
第3層 褐色土 (10YR4/4) 黒褐色土少量  
第4層 黒褐色土 (10YR2/3) □-△粒微量



図版 9 SK

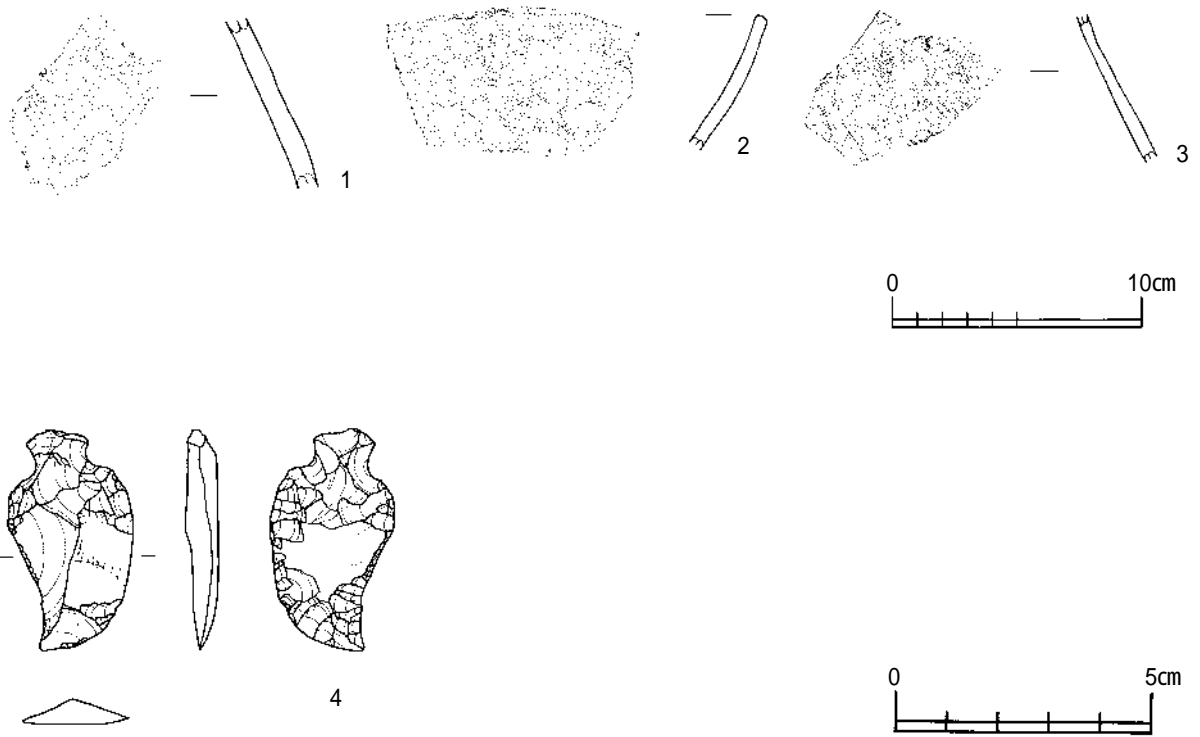


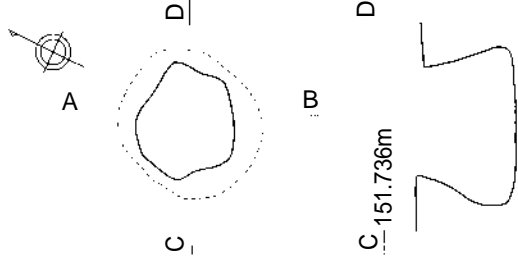
表1 深沢(3)遺跡遺構内出土土器観察表

図版番号	遺構名	層位	器形	部位	文様	分類	備考
2-1	SQ-04	覆土	深鉢	胴	胴・RL(縦)		
2-2	SQ-04	覆土	深鉢	胴	胴・LR(横・斜)		
3-1	SQ-05	覆土	深鉢	口	口縁・R押(横・縦)貼付隆帯(R押(横))		
10-1	SK-03	第9層	壺	胴	胴・無文		
10-2	SK-03	第2層	深鉢	口	口・無文		
10-3	SK-03	第2層	壺	胴	胴・無文		
12-1	SD-04	覆土	椀or小甕	胴	内黒		試掘調査トレンチ40
12-2	SD-04	覆土	甕	底	底面無調整		試掘調査トレンチ40

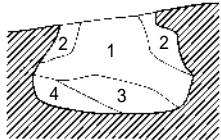
表2 深沢(3)遺跡遺構内出土石器観察表

図版番号	遺構番号・出土地点	層位	最大計測値(mm)			重量(g)	石質	器種	整理番号	備考
			長さ	幅	厚さ					
10-4	SK-03	第2層	44.0	24.5	6.5	5.8	珪質頁岩	石匙	31102001	

SK - 09

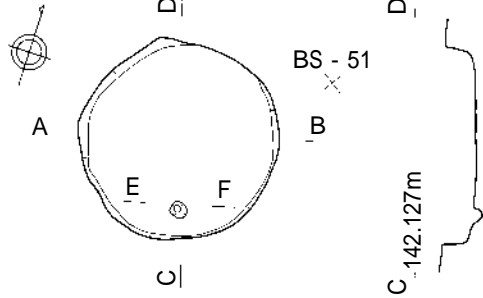


AY - 49  
A 151.736m B

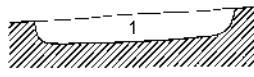


SK - 09  
第1層 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量、炭化物微量  
第2層 黒褐色土 (10YR2/3) 褐色土少量、ローム粒微量  
第3層 黒色土 (10YR1.7/1) ローム粒、炭化物微量  
第4層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒、炭化物微量

SK - 10

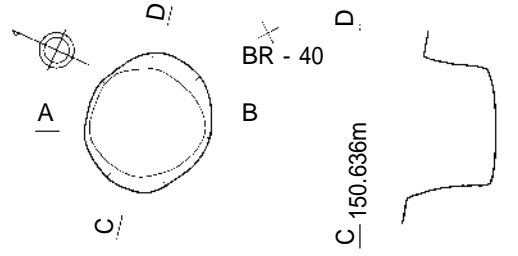


A 142.127m B E 142.127m F

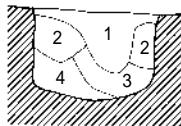


SK - 10  
第1層 黒褐色土 (10YR3/2) と黒色土との混合土 ローム粒中量

SK - 11

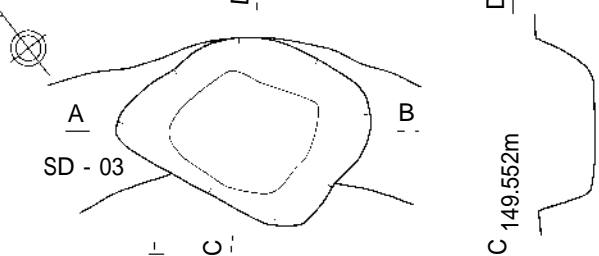


A 150.636m B

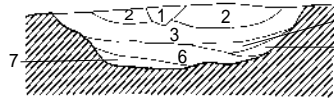


SK - 11  
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒少量、炭化物微量、暗褐色土少量  
第2層 黄褐色土 (10YR5/6)  
第3層 褐色土 (10YR4/4) ローム粒微量  
第4層 褐色土 (10YR4/6) ローム粒微量

SK - 12

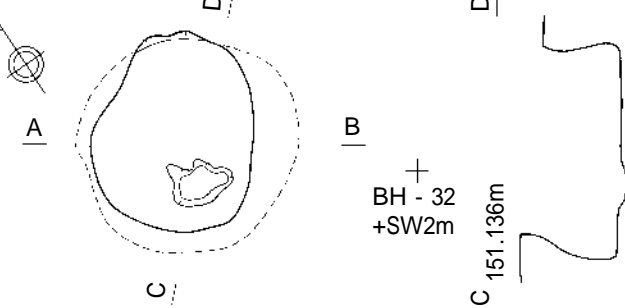


AH - 55  
A 149.552m B

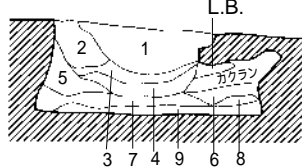


SK - 12  
第1層 黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量  
第2層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒多量  
第3層 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量  
第4層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒少量  
第5層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)  
第6層 褐色土 (10YR2/3) ローム粒・褐色土微量  
第7層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒微量

SK - 13

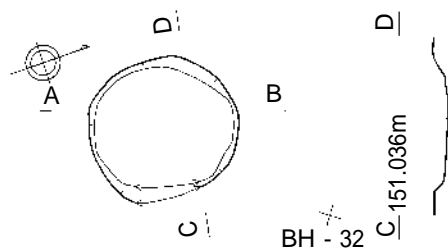


A 151.136m B

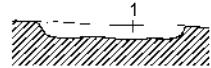


SK - 13  
第1層 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒・炭化物中量、褐色土少量、パミス微量  
第2層 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒中量、褐色土少量、炭化物微量  
第3層 褐色土 (10YR4/4) 暗褐色土微量  
第4層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒中量、炭化物微量  
第5層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ロームブロック少量  
第6層 褐色土 (10YR4/6) ロームブロック少量  
第7層 暗褐色土 (10YR3/3) ロームブロック中量  
第8層 黒褐色土 (10YR2/2)  
第9層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ロームブロックと暗褐色土 (10YR3/3) の混合土

SK - 14



A 151.036m B

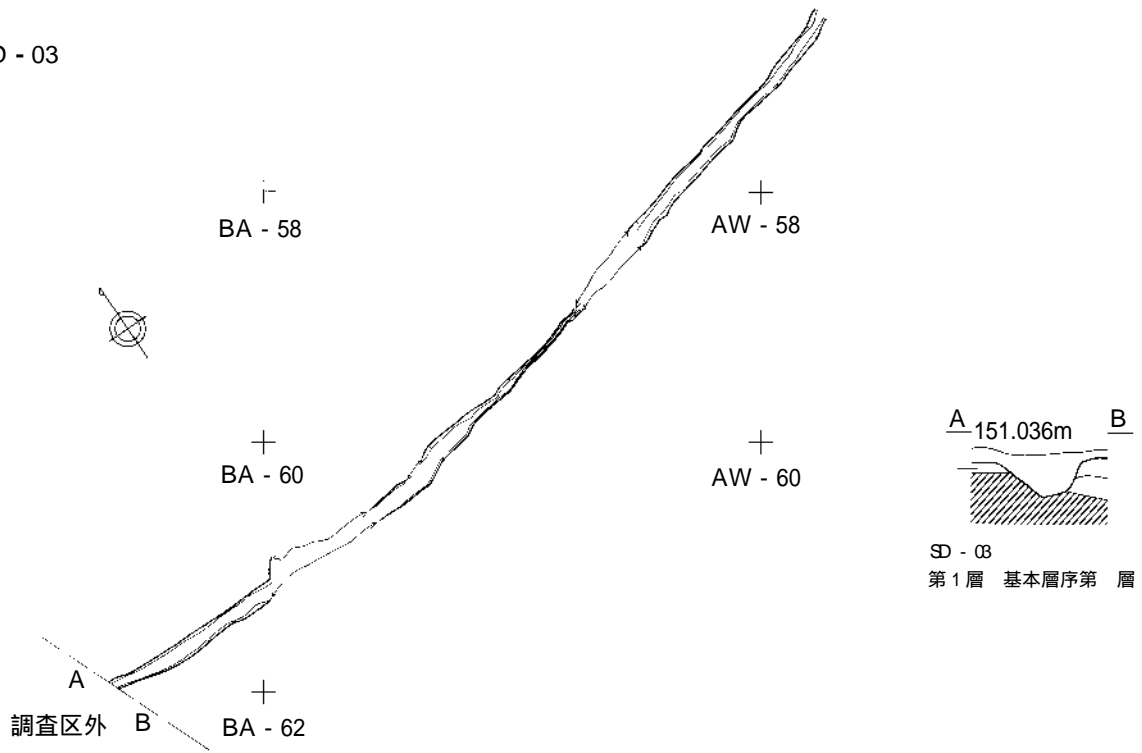


SK - 14  
第1層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒少量  
パミス微量

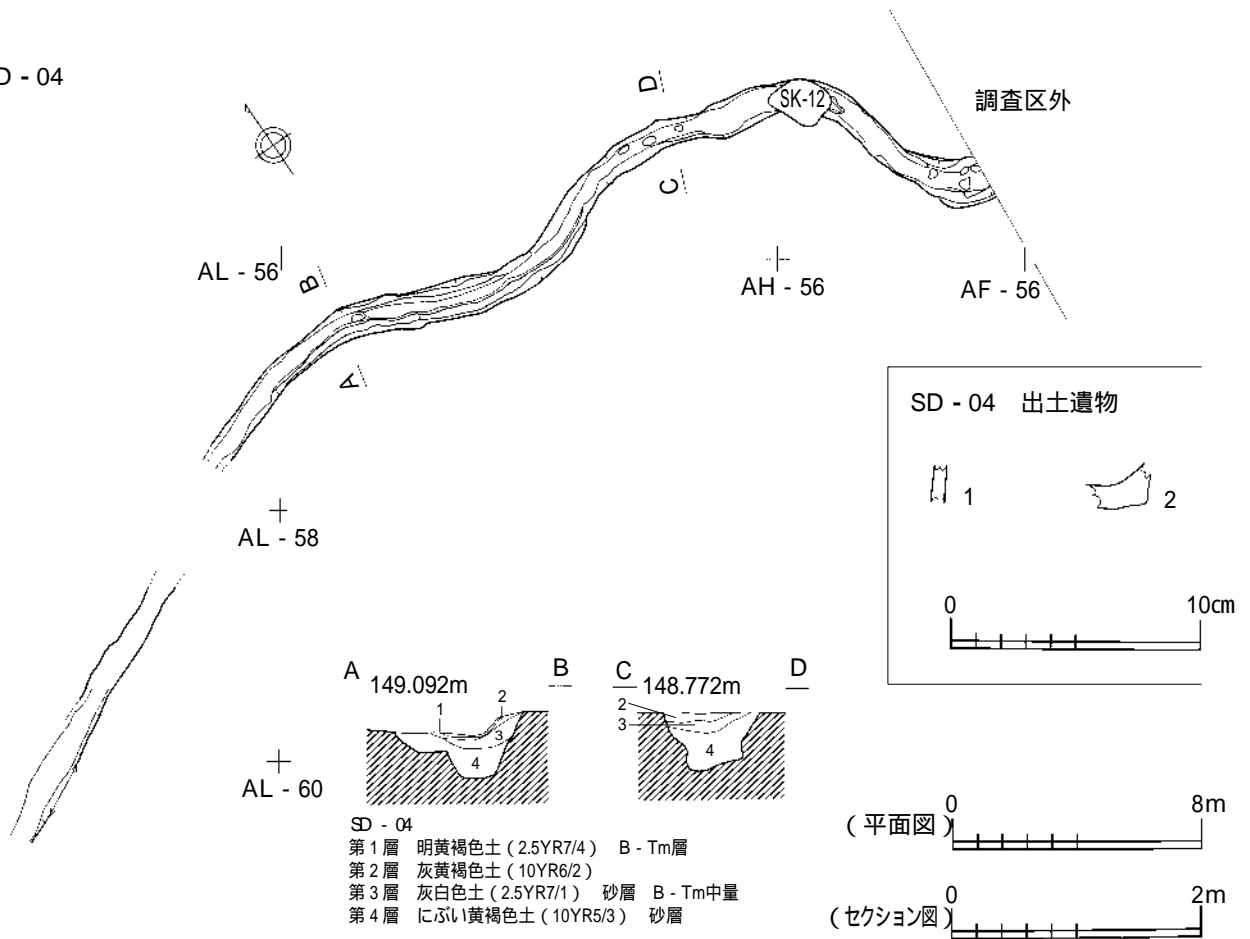


図版11 SK

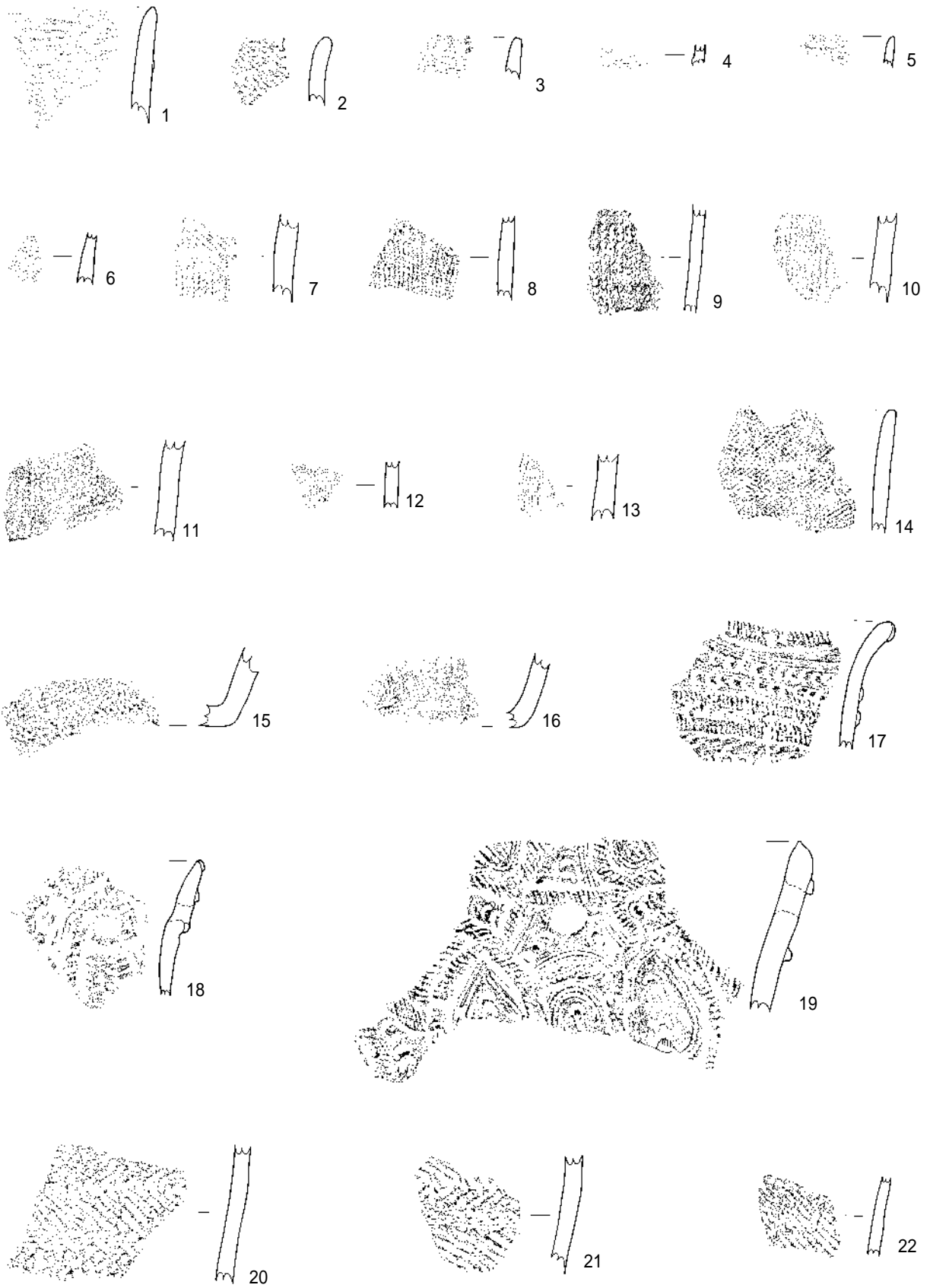
SD - 03



SD - 04

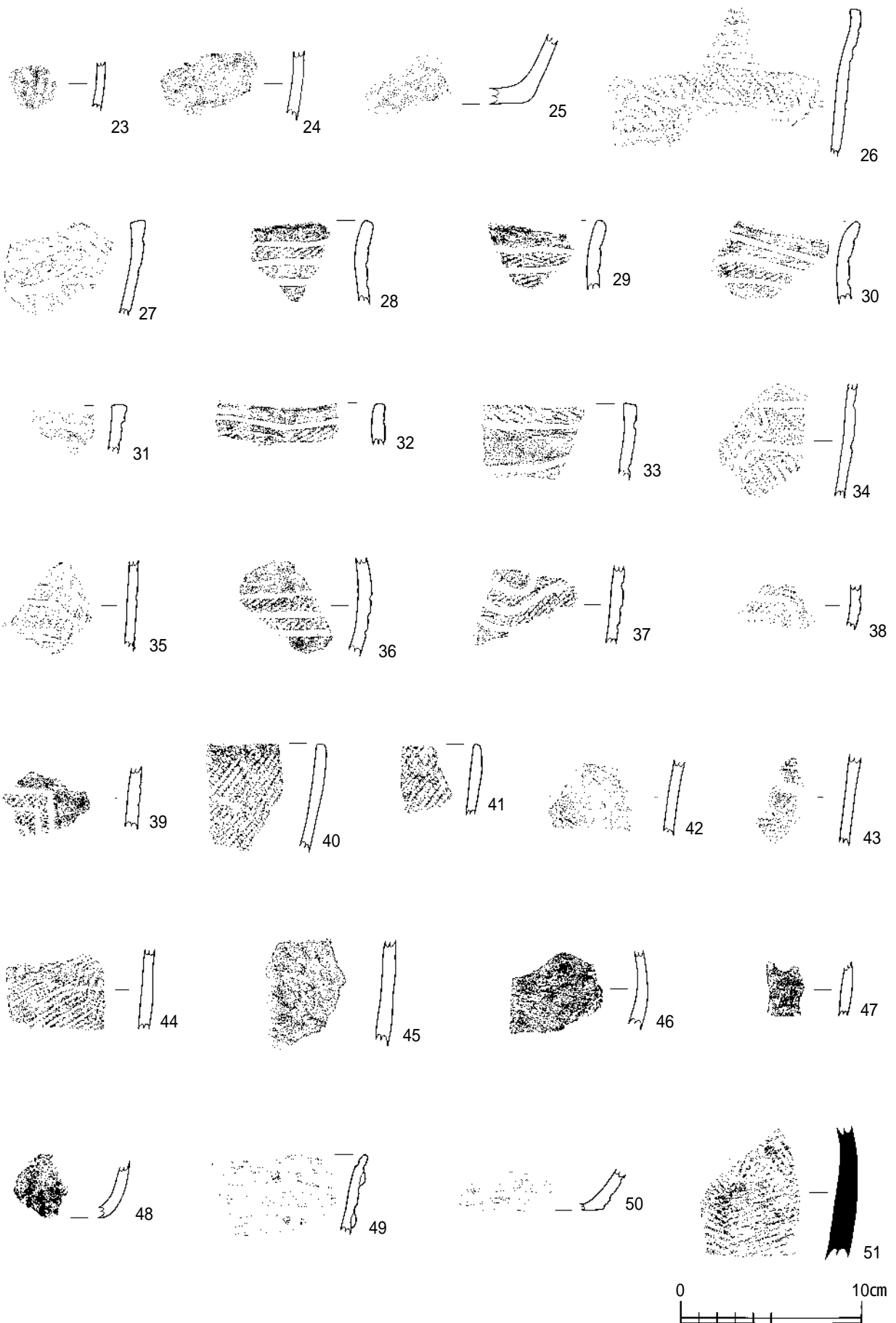


図版12 SD

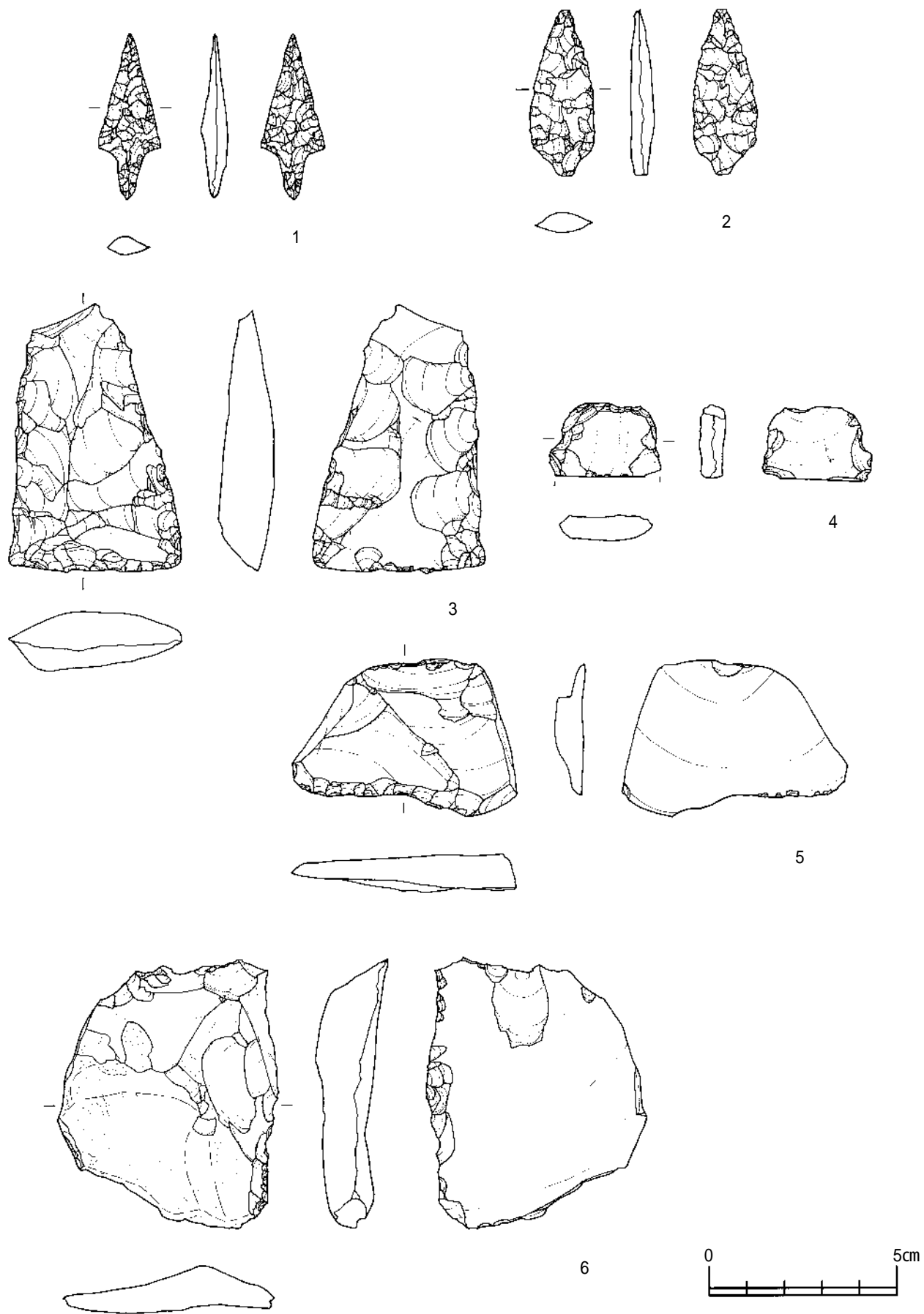


图版13 遺構外出土土器

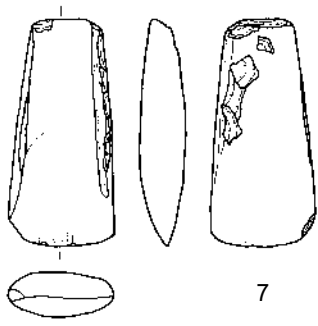




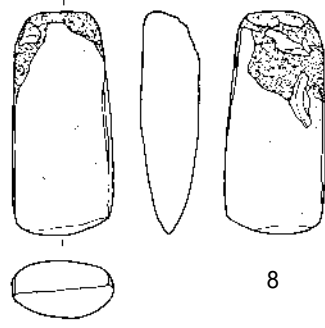
图版14 遺構外出土土器



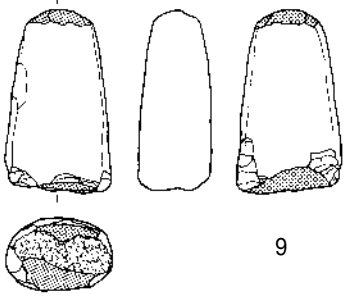
图版15 遺構外出土石器



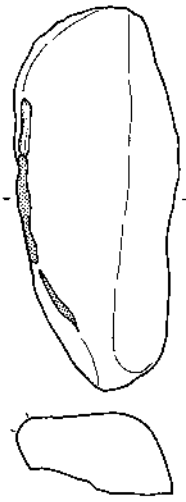
7



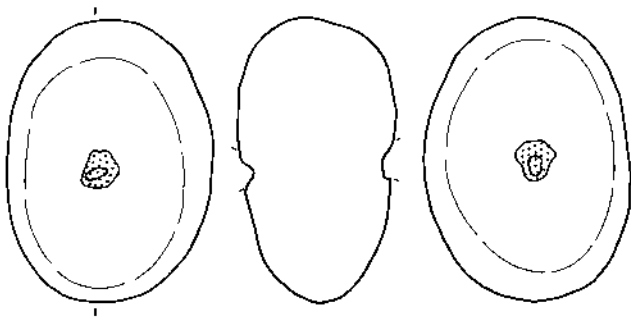
8



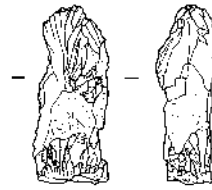
9



10



11



12



图版16 遺構外出土石器

表3 深沢(3)遺跡遺構外出土土器観察表

図版番号	遺構名	層位	器形	部位	文様	分類	備考
13-1	AG - 23		深鉢	口	口縁・R押(横・斜)貼付隆帯(R押(横))胴・LR(横)		
13-2	不明		深鉢	口	口縁・LR押(横)LR(横)		
13-3	AP - 45		深鉢	口	口縁・R押(横)LR(横)		
13-4	AF - 24		深鉢	口	口縁・R押(横)		
13-5	AR - 46		深鉢	口	口縁・L押(横)		
13-6	AR - 46		深鉢	口~底	口縁・L、胴・LR(横)		
13-7	AG - 24		深鉢	胴	胴上・結束第一種(LR・RL)胴下・RLR(斜)		
13-8	AP - 45		深鉢	胴	胴上・R結(横)胴下・L単軸絡糸体第1類(縦)		
13-9	S - 46		深鉢	胴	胴・RLR(斜)		
13-10	AH - 41		深鉢	胴	胴・LR単軸絡糸体第1類(縦)		
13-11	AF - 24		深鉢	胴	胴・RLR(斜)		
13-12	AP - 45		深鉢	胴	胴・L単軸絡糸体第1類(縦)		
13-13	BD - 59		深鉢	胴	胴・R+R単軸絡糸体第1A類(縦)		
13-14	AJ - 42		深鉢	口~胴	口~胴・結束第一種(LR前々多)・RL(前々多))		
13-15	AF - 24		深鉢	胴~底	胴・RLR(斜・横)		
13-16	AV - 42		深鉢	胴~底	胴・L単軸絡糸体第1類(縦)		
13-17	BZ - 58		深鉢	口~胴	口縁・L押、R押、L馬蹄状押、貼付隆帯(L押による刻目)		
13-18	AZ - 52		深鉢	口	口縁・L(刺突)貼付隆帯(L押による刻目)		
13-19	AZ - 58		深鉢	口	口縁・L押(馬蹄状)貼付隆帯(L押による刻目)		
13-20	AZ - 58		深鉢	胴	胴・結束第一種(LR前々多)・RL(前々多))		
13-21	BZ - 58		深鉢	胴	胴・結束第一種(LR前々多)・RL(前々多))		
13-22	BZ - 58		深鉢	胴	胴・結束第一種(RL・RL)		
14-23	AN - 60		深鉢	胴	施文摩滅により不明		24、25と同一個体
14-24	AN - 60		深鉢	胴	施文摩滅により不明		23、25と同一個体
14-25	AN - 60		深鉢	胴~底	施文摩滅により不明		23、24と同一個体
14-26	BC - 60		深鉢	口~胴	沈線、RL		
14-27	BC - 60		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、RL		
14-28	AZ - 58		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、LR		
14-29	BZ - 58		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、RL		
14-30	BZ - 58		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、LR		
14-31	BD - 59		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、RL(横)		
14-32	AZ - 58		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、LR		
14-33	BC - 60		深鉢	口	口縁・波状口縁、沈線、RL		
14-34	BC - 60		深鉢	胴	胴・沈線、RL		
14-35	BC - 60		深鉢	胴	胴・沈線、RL		
14-36	BZ - 58		深鉢	胴	胴・沈線、LR		
14-37	BZ - 58		深鉢	胴	胴・沈線、LR		
14-38	AY - 57		深鉢	胴	胴・沈線、LR		
14-39	BZ - 58		深鉢	胴	胴・沈線、LR		
14-40	BZ - 58		深鉢	胴	口縁・波状口縁、沈線、LR		
14-41	BZ - 58		深鉢	口	口縁・平坦口縁、沈線、LR		
14-42	AX - 53		深鉢	胴	胴・LR(縦)		
14-43	AX - 53		深鉢	胴	胴・LR(斜)		
14-44	BZ - 58		深鉢	胴	胴・LR(横)		
14-45	BZ - 58		深鉢	胴	胴・無文		内面炭化物付着
14-46	BZ - 58		壺	胴	胴・無文		
14-47	BZ - 58		深鉢	胴	胴・無文		
14-48	BZ - 58		壺	胴	胴・無文		
14-49	AZ - 52		鉢	口~胴	口縁・沈線(変形工事文)粘土瘤貼付		50と同一個体
14-50	AZ - 52		鉢	胴~底	胴・沈線		49と同一個体
14-51	AH - 44		甕	胴	外面・タタキ、内面・ハラナデ		須恵器

表4 深沢(3)遺跡遺構外出土石器観察表

図版番号	遺構番号・出土地点	層位	最大計測値(mm)			重量(g)	石質	器種	整理番号	備考
			長さ	幅	厚さ					
15-1	AG - 25		45.0	17.0	7.0	2.7	珪質頁岩	石鏃	31102002	
15-2	AG - 24		45.0	17.5	6.0	3.2	珪質頁岩	石鏃	31102003	
15-3	BA - 60		73.0	46.5	15.0	49.4	珪質頁岩	石籠	31102004	
15-4	AF - 24		20.0	29.0	7.5	5.2	珪質頁岩	不定形	31102005	
15-5	BB - 58		60.0	42.5	11.0	23.7	珪質頁岩	不定形	31102006	
15-6	地区トレンチ		73.5	59.0	19.5	67.0	珪質頁岩	不定形	31102007	
15-7	AJ - 57		91.0	41.0	18.0	104.0	デイサイト	石斧	31102008	刃部は両刀でやや偏刀。両側辺りに擦切痕有。
15-8	BA - 58		89.0	39.0	23.0	143.3	輝緑凝灰	石斧	31102009	基部破損後、破損面を敲打で加工し再利用。刃部は両刀。
15-9	AZ - 58		73.0	41.0	28.0	137.8	閃緑岩	敲磨器類	31102010	磨製石斧の破損後、敲磨器に転用。
15-10	AH - 26		152.0	64.0	33.0	381.3	安山岩	敲磨器類	31102011	
15-11	AQ - 62		113.0	81.0	62.0	620.0	安山岩	敲磨器類	31102012	
15-12	AU - 47		36.0	15.0	12.0	7.9	水晶		31102013	



調査前風景



地区基本層序 1



地区基本層序 2



地区基本層序 2



SQ - 01セクション



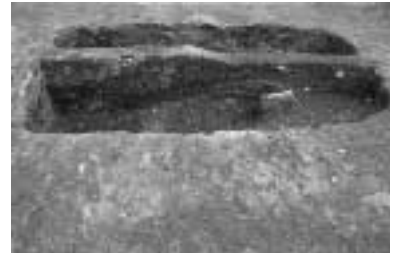
SQ - 01完掘



SQ - 02セクション



SQ - 02完掘



SQ - 03セクション



SQ - 03完掘



SQ - 04セクション



SQ - 04完掘



SQ - 05セクション



SQ - 05内Pit 1 セクション



SQ - 05完掘



SQ - 06セクション



SQ - 06完掘



SQ - 07セクション



SQ - 08セクション 1



SQ - 08セクション 2



SQ - 08完掘



SQ - 09セクション



SQ - 09完掘



SQ - 10セクション



SQ - 10焼土・炭化物検出状況



SQ - 11セクション



SQ - 11焼土・炭化物検出状況



SQ - 12セクション



SQ - 12炭化物検出状況



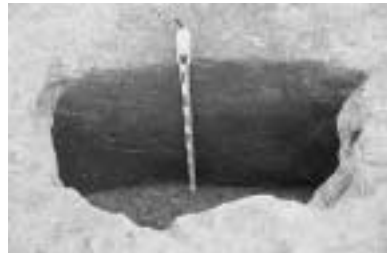
SQ - 12完掘



SK - 03セクション



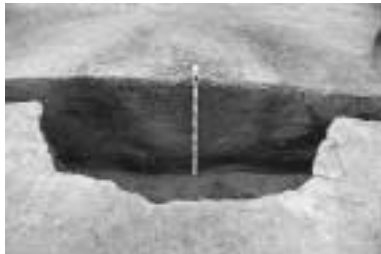
SK - 03完掘



SK - 09セクション



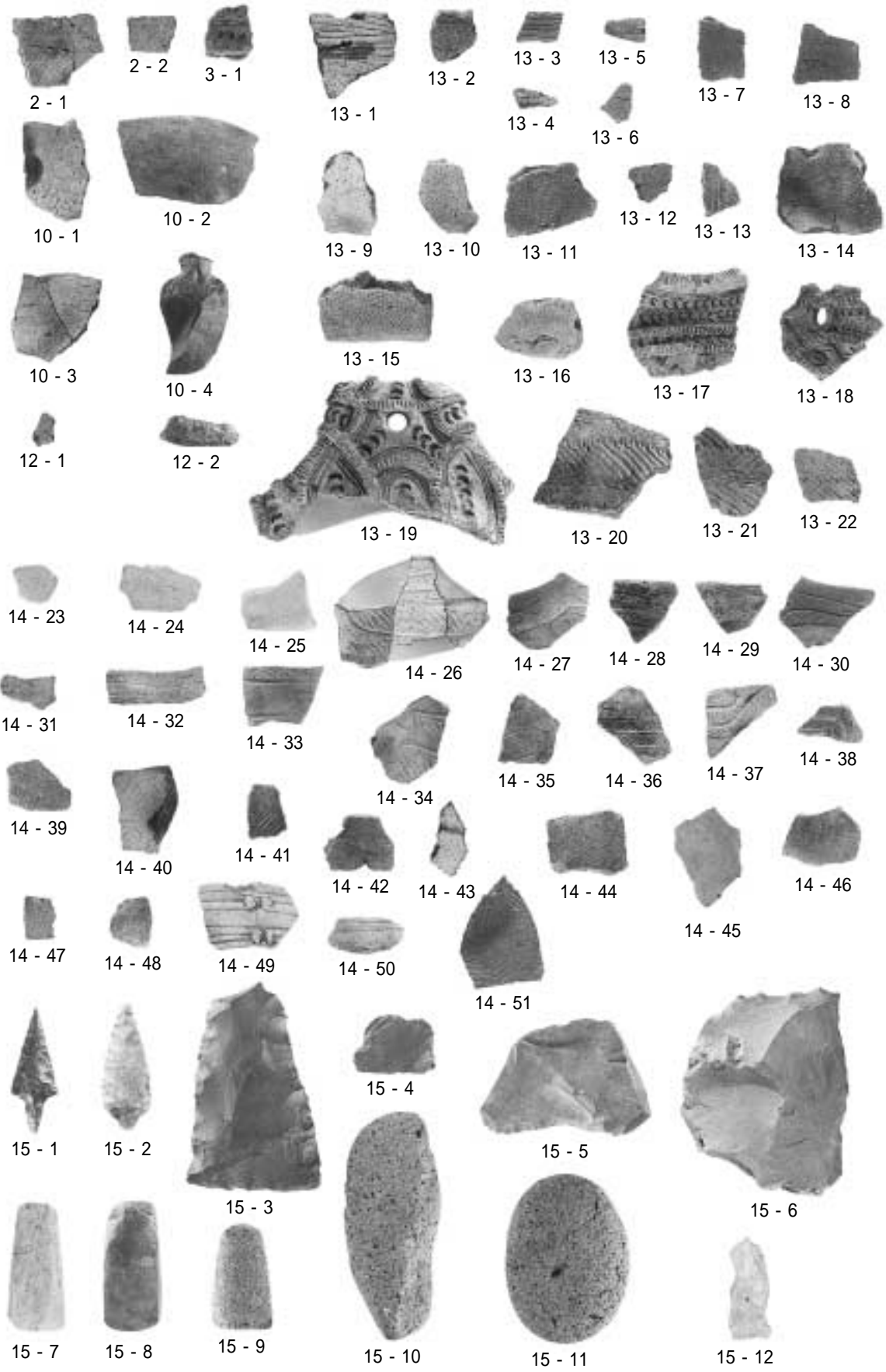
SK - 09完掘



SK - 13セクション



SK - 13完掘



写真图版 3

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふかざわかっこさんいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	深沢(3)遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	小野 貴之、木村 淳一							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22 - 5      017 - 734 - 1111							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (JGD20000)	東経 (JGD20000)	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふか 深 沢 (3)	あおもりし ああおごま 青森市大字駒 ごめ あざ ふかざわ 込字深沢1 - 56ほか	02201	311	40 ( 40 ° )	140 ( 140 ° )	20011021	4,090	東北新幹線建 設事業に係る 排土置場造成
						}		
						20011109		
						20020527		
						20020628	10,770	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
深 沢 (3)	集落跡	縄文 弥生 平安 中世以降	木炭窯 土 坑 溝 跡	10基 15基 2 条	縄文土器 弥生土器 石器 須恵器 土師器			



# 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』	〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』	〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』	〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』	〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』	〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
		1979	『蛭沢遺跡』	〃	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』	〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
青森市の埋蔵文化財	1983		『山野峠遺跡』	〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
	1985		『長森遺跡発掘調査報告書』	〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
	1986		『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
	1987		『横内城跡発掘調査報告書』	〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報』
	1988		『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書				〃	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	〃	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	〃	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書』 野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』	〃	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』	〃	第56集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	〃	第57集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』	〃	第58集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	〃	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	〃	第60集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	〃	第61集	2002	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』	〃	第62集	2002	『稲山遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	〃	第63集	2002	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』	〃	第64集	2002	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	〃	第65集	2003	『雲谷山吹(4)-(7)遺跡発掘調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』	〃	第66集	2003	『稲山遺跡発掘調査報告書III』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	〃	第67集	2003	『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	〃	第68集	2003	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』	〃	第69集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書11』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』	〃	第70集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』				

青森市埋蔵文化財調査報告書第67集

## 深沢(3)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成15年3月31日

発行 青森市教育委員会  
〒030-8555 青森市中央一丁目22-5  
TEL 017-734-1111

印刷 東北印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12  
TEL 017-742-2221

